

# 寺谷内遺跡・寺谷内横穴墓調査報告

—平成19年度、岸谷川砂防改良事業に伴う調査—

2009年2月

高岡市教育委員会

## 寺谷内遺跡・寺谷内横穴墓調査報告

—平成19年度、岸谷川砂防改良事業に伴う調査—

2009年2月

高岡市教育委員会





1. 遺跡遠景（東）



2. A区全景（垂直）





1. B区全景（南）



2. C区全景（北）





1. 横穴墓検出状態（北）



2. 横穴墓玄室部近景（北）



## 序

高岡市の西側に連なる山並みは西山丘陵と通称されています。ここの中峰のひとつが元取山です。

元取山東麓の微高地に立地しているのが福岡町加茂の集落です。当地の北西側尾根上には元取山を最高所とする鶴城が築かれました。南北朝時代に南朝方の拠点となつた城です。この時代には、京都の加茂神社へ競馬を献上し、これにより上加茂社と下加茂社が勧請されました。このころから加茂（鶴）と呼ばれてきたようです。

加茂集落の背後の北側丘陵斜面には、古墳・飛鳥時代の加茂ねらみ山古墳群・加茂横穴墓群が分布しています。これと谷を挟んだ南側中腹部は、室町時代の雲龍寺跡の所在地とされてきました。谷間の奥には袋谷の滝があります。

この度、加茂地区の寺谷内・雲龍寺谷等と称されている谷間に砂防ダムが設置されることとなり、当「寺谷内遺跡」の発掘調査を実施しました。ここに報告しますのはその成果です。

最後になりましたが、調査実施にご協力いただきました関係各位、地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成21年2月

高岡市教育委員会  
教育長 村井 和

## 例　　言

1. 本書は、小矢部川水系岸谷川砂防改良事業に伴う、寺谷内遺跡・寺谷内横穴墓発掘調査の報告書である。
2. 当調査は、富山県高岡市土木センターの委託を受けて、高岡市教育委員会が実施した。
3. 調査実務は、高岡市教育委員会の監理で、株式会社アーキジオが行った。
4. 調査は平成18~20年度に実施した。

　　平成18年度：試掘調査

　　平成19年度：本調査

　　平成20年度：報告書作成

5. 調査関係者は以下のとおりである。

〔高岡市教育委員会文化財課〕

　　文化財課長：笠島千恵子（平成18・19年度）、東保英則（平成20年度）

〔埋蔵文化財担当〕

　　主幹：本林弘吉（平成18・19年度）、岡山哲朗（平成20年度）

　　副主幹：山口辰一

　　主査：荒井隆

〔株式会社アーキジオ〕

　　代表取締役社長：津嶋春秋

　　文化財調査部：桑野正文（部長）、中井英策（上任調査員）、山所人志（調査員）

　　地盤調査部：野崎保（技術士）、林達雄（施工管理技士）

6. 現地調査は、中井・山所が担当した。

7. 資料整理・報告書作成は中井が担当した。

8. 報告書編集業務は、岡田一広・樋谷潤（以上株式会社エイ・テック）が行い、宮本久子（有限会社毛野考古学研究所）が協力した。

9. 現地調査において、以下の各位よりご援助いただいた。

（順不同・敬称略）

　　真宗大谷派超願寺、永田実、加茂地区住民各位

10. 本書の執筆担当は以下のとおりである。

　　調査経過一山口、地質調査一野崎、その他一中井

## 凡　　例

1. 本書で示す方位は、座標北である。水平基準は海拔（m）である。

2. 本書における遺構記号は次のとおりである。

　　S D - 溝、P - ピット

## 調査参加者名簿

上見昭雄、井淵信幸、今井博、小幡弘、蒲田昌出夫、川原正信、地崎新一、寺岡秀作  
中西広次、西野繁夫、林英昭、吉田良雄（以上福岡シルバーハウスセンター）

高岡市輝蔵文化財調査報告第19冊  
寺谷内遺跡・守谷内横穴墓調査報告

目 次

巻首図版

序

例 言

目 次

第1章 序 説 .....	1
第1節 遺跡概観 .....	1
第2節 調査経過 .....	4
第2章 試掘調査 .....	5
第1節 調査方法 .....	5
第2節 地質調査 .....	7
第3節 調査結果 .....	9
第3章 本 調 査 .....	15
第1節 調査方法 .....	15
第2節 調査結果 .....	17
第4章 遺 物 .....	21
第5章 結 語 .....	23

## 図面目次

図面01~12 遺構実測図

図面13・14 遺物実測図

## 図版目次

巻首図版01 1. 遺跡遠景（東）、2. A区全景（垂直）

巻首図版02 1. B区全景（南）、2. C区全景（北）

巻首図版03 1. 横穴墓検出状態（北）、2. 横穴墓玄室部近景（北）

図版01~07 遺構写真

図版08 遺物写真

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図〔1〕 (1/15万) .....	1
第2図 遺跡位置図〔2〕 (1/5万) .....	2
第3図 遺跡分布図 (1/1万5千) .....	3
第4図 試掘調査地区位置図 (1/5,000) .....	5
第5図 地質図 (1/2,000) .....	6
第6図 模式地質縦断面図 .....	7
第7図 模式地質横断面図 .....	8
第8図 第4トレンチ全景（東） .....	10
第9図 第6トレンチ全景（南） .....	10
第10図 第12トレンチ全景（北） .....	12
第11図 第16トレンチ全景（北） .....	13
第12図 第16トレンチ全景（東） .....	13
第13図 試掘調査地区トレンチ配置図 (1/1,000) .....	14
第14図 本調査地区割図 (1/500) .....	16
第15図 A区溝検出状態（西） .....	17
第16図 A区横列検出状態（西） .....	17
第17図 B区全景（南西） .....	18
第18図 C区着手前（東） .....	18
第19図 C区完掘状況（東） .....	19
第20図 横穴墓着手前（北） .....	19
第21図 墓前域工具痕 .....	20
第22図 玄室奥（垂直） .....	20
第23図 方眼操作による構造上の企画 (1/50) .....	24

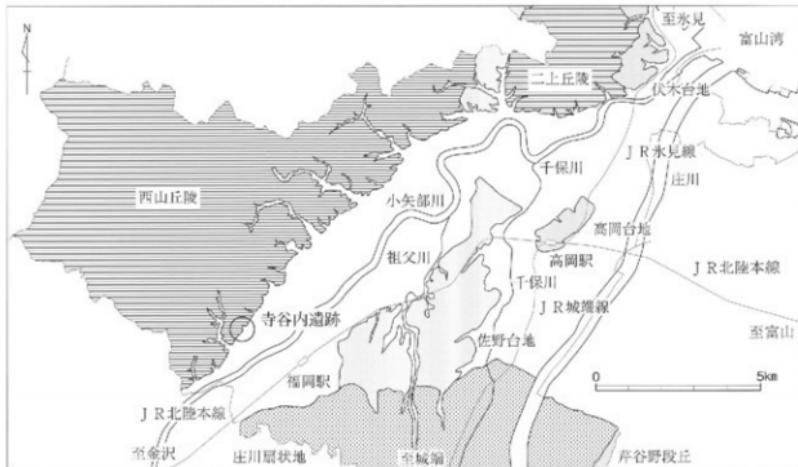
# 第1章 序 説

## 第1節 遺跡概観

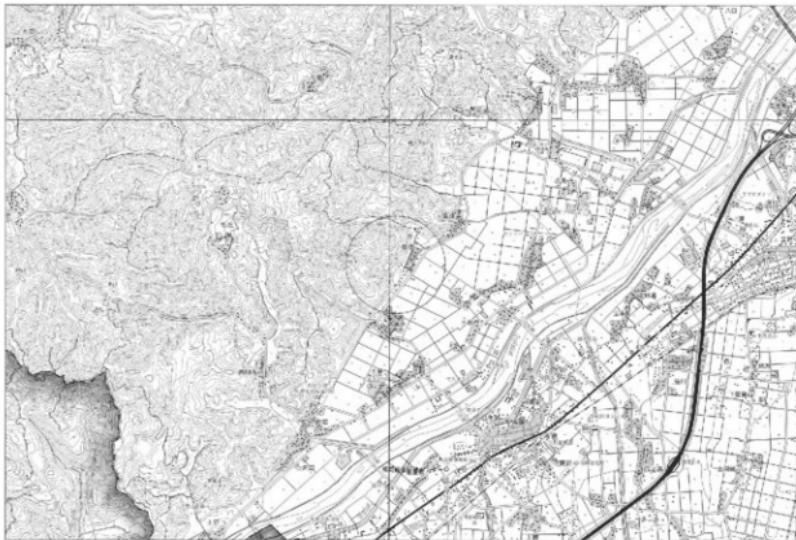
### 1. 地理的環境

寺谷内遺跡は、現在の行政区画において富山県高岡市福岡町に属する。福岡町は近接して流れる小矢部川の水運と密接に関わってきた。寺谷内遺跡もまた同様に、小矢部川の水運を主とした交通と密接な関わりを持つと考えられる。小矢部川は富山県と岐阜県の境である大門山に源を発し、砺波野と呼ばれる庄川扇状地の西部末端を北流する。平野部の最西端である小矢部市付近で西砺波丘陵にさえぎられ大きく東に流れを変え、右岸に高岡台地を臨みつつ富山湾に注ぐ。今回の調査地は、東に向きを変える箇所の下流左岸の西山丘陵に位置する。丘陵の周縁には開析谷が展開し、これらによる小扇状地には現集落が展開する。加茂の集落もそのひとつに含まれる。

寺谷内遺跡は、名のとおり谷部に位置する遺跡で、加茂の集落の西側背後に位置する奥行きが約150mの谷に立地している。この谷に寺が存在したという伝承から、「雲龍寺谷」「寺谷内」や、地形から「袋谷」等の別称がある。



第1図 遺跡位置図〔1〕（1／15万）



第2図　遺跡位置図（2）（1／5万）

## 2. 歴史的環境

### 寺谷内遺跡

「寺谷内」は、「雲龍寺谷」とも呼称されている。地元には、谷の内部に雲龍寺の場所が伝承されており、現地に付近で発見された無縫塔などが立てられている。実際に谷を流れる川からは、15~16世紀頃の遺物がしばしば採集されており、雲龍寺の伝承とあわせて遺跡であることが知られていた。

### 雲龍寺

石川県金沢市に現存する寺である。その歴史は古く、永正8年（1511）に越中国五位莊高昌村（加茂）に開山し、慶長6年（1611）に加賀の地に移転したと記録が残る。

雲龍寺の資料として1999年に谷奥の川底から見つかった「無縫塔」が挙げられる。この無縫塔の碑文には、「現住十九代魯溪」が、移転先の加賀から、雲龍寺を開山した「以州須永大和尚」の250回忌（明和5年 - 1768年と推測される）を記念して、開山の地に建立したと記されている。また、昭和26年に編纂された越中史徵の「雲龍寺址」の項で開山以州和尚の墳墓ありと記述されており、明治時代には無縫塔が現出していたと考えられる。このように雲龍寺の所在については、寺の移転から100年以上経った当時の「伝承による位置」が今まで伝えられているといえよう。しかし、「伝承による位置」に建立された石碑が正確に開山当時の雲龍寺の場所を示しているかは不明である。雲龍寺については地元の郷土史家によって地道な資料収集・検討がなされており、考古学的な裏付けが待たれている。



第3図 漢跡分布図（1／1万5千）

1. 寺谷内遺跡・寺谷内横穴墓
2. 赤丸城跡
3. 銚子平横穴墓群
4. 舞谷前田鳥遺跡
5. 舞谷ノリコシ古墳群
6. 舞谷紙堂古墳群
7. 稲持寺跡
8. 舞谷第三塚
9. 城ヶ平遺跡
10. 馬場遺跡
11. 馬場西傍路
12. 馬場古墳群
13. 加茂横穴道跡
14. 加茂神社古墳群
15. 馬場東古墳
16. 稲持跡
17. 加茂ねらみ山古墳群
18. 加茂横穴墓群
19. 加茂遺跡
20. 三日市西遺跡
21. 鳥食御玉田遺跡
22. 鳥食遺跡
23. 土岸古墳群
24. 下向田古墳群
25. 下向田遺跡
26. 下向田東遺跡

### 加茂遺跡

遺跡地図では古代～近世にかけての遺物散布地となっている。また、背後の尾根には加茂横穴墓群があり、古墳時代後期に遡る遺跡の可能性を指摘できる。

### 鴨城跡（かもじょうあと）

寺谷内遺跡の分布する加茂・鳥倉の山間・山頂部を占める。康安2年（北朝）＝1362年『二宮円阿軍忠状』に「鴨衆」とみえ、鴨城を基点に頭高城（頭川城）を攻略したことが記されている。延徳3年（1491）冷泉為広の『越後下向日記』には「カモ山ノフツツ城」という記述がある。フツツ城は丘陵の奥に位置し、小矢部川からはみることができないため為広が鴨城と混同したものと理解されている。

これらの史料から14世紀中頃から15世紀末にかけて利用されていたと推定されている。

### 加茂横穴墓群（かもよこあなぼぐん）

寺谷内遺跡の北側尾根に分布する横穴墓群である。2000年の踏査で26基が確認されている。過去には明治41年（1908）に隣接する馬場城ヶ平横穴墓群で大規模な発掘が行われ、同時に加茂横穴墓群でも発掘が行われたと考えられている。

## 第2節 調査経過

平成18年1月、富山県高岡土木センターより、高岡市教育委員会文化財課へ小矢部川水系岸谷川砂防改良工事の事業計画が示され、埋蔵文化財試掘調査の実施依頼があった。

これより先、平成17年11月1日に、旧高岡市と旧福岡町は合併して新「高岡市」が発足した。旧福岡町域は富山県小矢部土木センターの管轄区域で、上記の工事は小矢部土木センターで計画されてきたものであるが、合併に伴い高岡土木センターの所管となったものである。

工事内容は砂防ダムを建設するものである。工事区域は福岡町加茂集落の背後一帯で、周囲には①加茂遺跡、②加茂横穴墓群、③伝雲龍寺跡等が所在していた。

山福岡町教育委員会は平成16年度事業として、当加茂集落を含む西五位地区（明治22年から昭和29年までの西五位村の範囲）で埋蔵文化財分布調査を実施し、平成17年3月31日発行の報告書でその成果が報じられた。この報告書で「伝雲龍寺跡」とされている遺跡内に工事計画の大半が含まれていた。

その後の協議を経て、平成18年10～11月に、当高岡市教育委員会が監理し、株式会社アーキジオが調査担当として試掘調査を実施するに至った。この結果、当該地が、縄文時代・古墳時代・中～近世の遺跡であることがわかった。当地においてこれまでに採集された遺物や今回の試掘調査の成果より、雲龍寺が所在したとされる16世紀代～17世紀初頭頃の遺物以外にも、縄文時代・古墳時代をはじめとして、各時代の遺構・遺物が確認される遺跡であることが判明した。単なる伝承地ではなく、具体的な遺構・遺物が確認された。また、雲龍寺時代以外のものの存在等もあり、「伝雲龍寺跡」を小字名より「寺谷内遺跡」と改称した。

試掘調査の結果を受けて、平成19年度に株式会社アーキジオが調査担当となって本調査を実施した。この調査において、横穴墓の可能性が高い遺構が検出され「寺谷内横穴墓」と命名した。

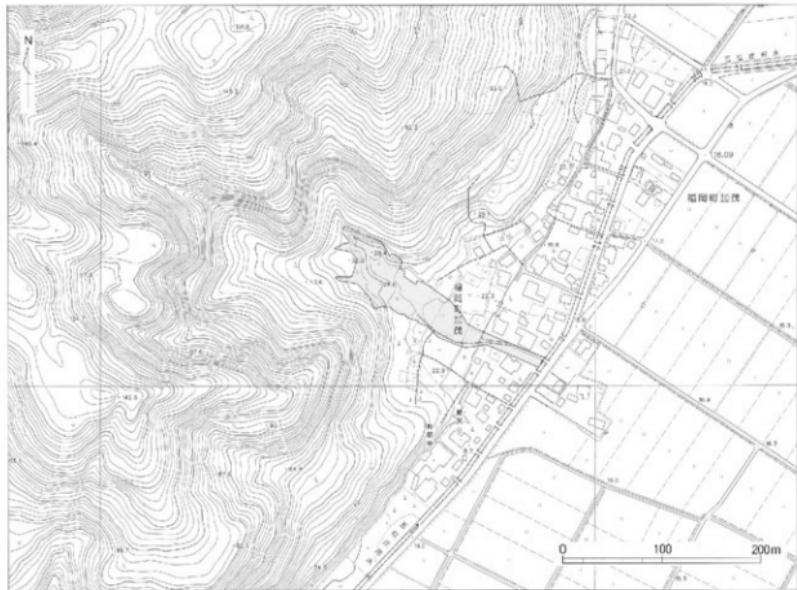
## 第2章 試掘調査

### 第1節 調査方法

試掘調査に着手するにあたって、地元の方に現地の状況を確認したところ、斜面が不安定で何度も地すべりや崩落を起こしているとのことであった。谷にあったという雲龍寺の伝承や無縫塔の発見の経緯からも、これらのこと事が裏付けられよう。現地に足を踏み入れての予備調査でも、木々の育成状態などから極めて最近の地すべりを窺うことができるほどであった。このことから、トレッチの設定や結果の検討には、地質的見地から古地形の推定復元を行って、現状地形の新旧を判定することが有効であると判断した。

古地形の推定復元は、地質調査技士とともに地形図の詳細な検討からはじめた。砂防工事の基礎となる1500の地形図に、地図上から読み取れる地すべり・崩落をマーキングし、現地踏査による確認を行った。あわせて、地質学的な調査も実施して作成した地質図が第5図である。

この結果では、古地形の復元までに至らなかったものの、おおよその地形の変化を知ることができ、試掘



第4図 試掘調査地区位置図 (1/5,000)

調査の指針と成り得た。試掘トレンチの配置はこの地質図を基に行った。

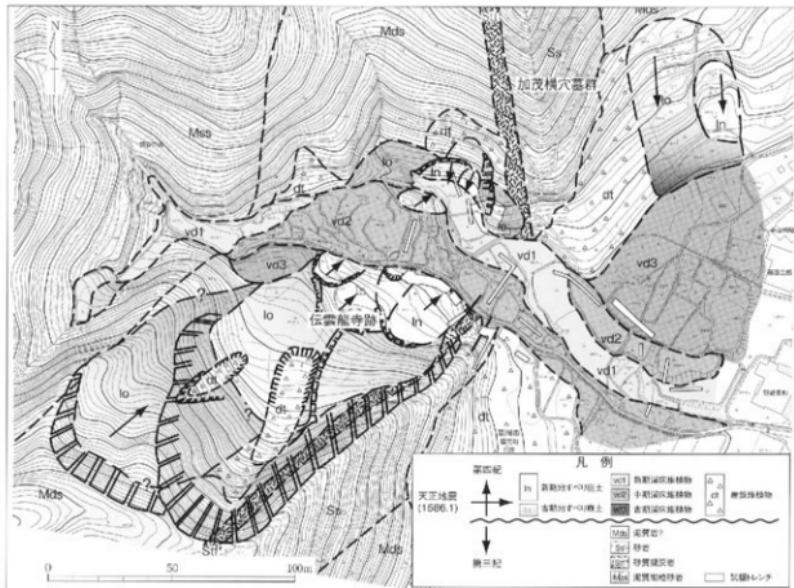
トレンチを設定した箇所には、地すべり・崩落による地形と判断されるものも含まれる。地すべり地形には平坦面の育成を伴うものが多く、これらの地形を利用した遺構または包含層を検出する可能性があるからである。

崩落土が堆積しているであろう場所については、崩落土中に包含層が混じる可能性が高い箇所に、堆積の状況を確認できるようにトレンチを設定した。

その他には、残存する平坦面にトレンチを設定した。また、北側斜面の立ち上がりは、崩壊等による影響を受けていない古い地形と考えられることから、加茂横穴墓群に含まれる未発見の横穴を推定して、縁辺部の表土を剥いで横穴の有無を確認した。

記録は、以下に基づいて行った。

- ・測量は KNO.14 (X=80475.4616 Y=-22074.1268 Z=18.335) を基準とした。
- ・トレンチの位置は現地内既設の工事用測量杭と新設のトレンチ測量杭を使用して、トータルステーションを用いて測量した。
- ・土色は、「新版 標準上色帖」 - 農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修 - (発行: 日本色研事業㈱)に基づいて記録した。



第5図 地質図 (1 / 2,000)

## 第2節 地質調査

### 1. 地質状況

調査地およびその周辺の地質状況を第5図にまとめた。以下、本図に基づいて記述する。

基盤の地層は新第三紀中新世～鮮新世の音川累層に相当する堆積岩類であり、NE走向でSE方向に70°前後の高角度であり、平野側に向かって順次新しい地層が分布していることになる。また、基盤層を覆って地すべり崩土や溪床堆積物等の被覆層が分布する。基盤層は数100万年以前の海底に堆積した地層であり、その後の地殻変動によって本来水平であったものが大きく変形傾斜したものである。そして、現在のような陥穫に現れているわけであるが、陥穫において山地を形成する過程で、これらの地層は侵食削除されることになった。つまり、現在みられる基盤層を覆う被覆層は、このような侵食の過程で発生した基盤層の削除堆積物であり、基盤層との間には大きな時代の差があり、当地域の被覆層の年代は、古くても数万年程度以降であろうと推定される。また、このように侵食削除された地層の上に別の新しい地層が覆っている状態を、「不整合」あるいは両者は不整合関係にあるといふ。以下には、古い地層から順に記述する。

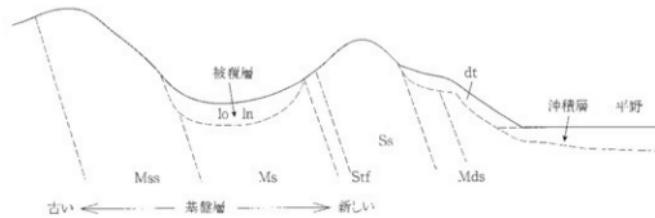
#### 基盤層

基盤層は上記のように高角度で平野側に傾斜しており、平野に近い位置にある地層が最も新しく、山側ほど古い地層ということになる。調査地の上流奥に袋谷の滝があり、この滝と右岸からの沢の合流点を過ぎた狭隘部まではやや泥質な細粒砂岩層 (Mss) が分布する。袋谷の滝と下流側狭隘部の渓床に露頭があり、比較的堅く固結しているが、ハンマーの軽打で容易に崩せる程度である。粒度がやや不均一であり、無層理塊状である。

その上位には泥岩層 (Ms) が乗っており、谷の出口に近いところまで分布している。露頭が少なく、下位の泥質細粒砂岩層との境界は不明である。調査地中央部付近の渓床部に露頭があり、無層理塊状であることがわかる以外に詳しい状況はわからない。両岸とも凹地形を呈するが、特に右岸側が地すべり斜面であり、大きくなっている。

谷の出口付近は幾分狭隘部になっており、両岸から幾分張り出した形の尾根地形となっている。ここには一部層理あるいは葉理の発達した砂岩層 (Ss) があり、右岸側山脚部にある横穴周辺でよく観察できる。一部細粒だが中粒の粒径のものが主体であり、固結度は低く、ハンマーのビックで容易に削ることができる程度である。左岸側張り出し尾根の中腹部にみられる加茂横穴墓群はすべてこの砂岩層中に掘られている。

この砂岩層と下位の泥岩層との間には厚さ4mあまりの砂質凝灰岩層 (Stf) が挟在している。右岸側山



第6図  
模式地質  
経断面図

脚部では白色細粒でシルトに近い粒度でサラサラとした感触のものがみられるが、その他の部分では上位の砂岩層によく似た岩相である。

上記砂岩層より上位の地層は露頭が無く不明である。既往の地質図では砂岩層 (Ss) が厚く分布しているように表現されている。しかし、谷が急に開けることや一部に地すべり地形がみられることなどから、地質図に示すように、両岸からの張り出し尾根以外の部分には泥質岩 (Mds) が分布している可能性が高い。

#### 被覆層

被覆層は地すべり崩土、渓床堆積物、崖錐堆積物に区分した。

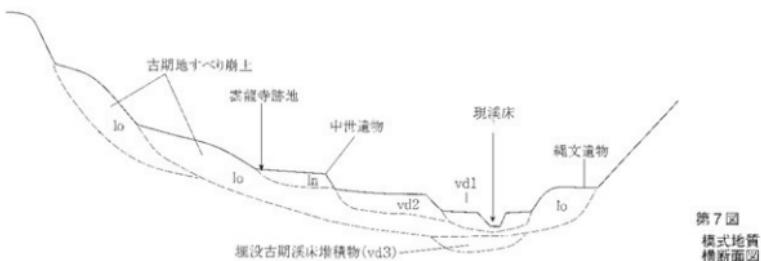
地すべり崩土は地すべりによって形成された崩積土であり、新旧2つに区分した。古期地すべり崩土 (lo) としたものは、有史以前のものであり、より新しい地すべりや崩壊あるいは侵食によってその一部が消失し、元の形が変わっている。ほとんどが泥岩層 (Ms) あるいは泥質岩 (Mds) の分布域にあり、相対的に新期のものより規模が大きい。新期地すべり崩土 (In) としたものは、遺物包含層を被覆していることから有史時代のものであり、古期地すべり崩土内に発生した2次地すべりによるものである。いずれも泥岩起源の土砂であり、粘性土主体であるが、斜面上部にある古期地すべり崩土は岩塊状のものを含むようである。

渓床堆積物は、溪流によって運ばれた土砂の堆積層であり、3つに区分した。古期渓床堆積物 (vd3) としたものは、古期地すべり崩土に対応する時代のものであり、現在の渓床より明らかに高い位置にあって、段丘状を形成しているものである。ただし、同時代の渓床堆積物が古期地すべり崩土の下に埋没している可能性がある。中期渓床堆積物 (vd2) と新期渓床堆積物 (vd1) は新期地すべり崩土にいる。いずれも砂岩、泥岩を起源とする土砂であり、多少円磨された軟質礫を含んでいる。

崖錐堆積物は、時代の区分や成因の区分が困難であり、一括して示したが、過去の小崩壊や落石による堆積物であり、軟質礫を含む土砂である。斜面の中腹から脚部に分布する。

## 2. 地すべり・崩壊

下記泥岩層の左岸側分布域は大きく窪んだ地形となっており、その上方の後縫部にはこれを取り巻くように滑落跡と考えられる凹形の急崖があることから、古い地すべり斜面であると考えられる。古期地すべりは、大きさは上下2つのブロックに分けられそうであるが、数回にわたって繰り返し発生したものであるらしい。また、急な滑落崖の部分には崩壊の痕跡がみられる。そして、その末端部には遺物包含層を覆う新期地すべり崩土があり、これは明らかに有史時代に古期地すべり崩土の末端部に生じた2次地すべりによるも



のである。この斜面内にあったとされる雲龍寺の伝説等から判断し、この地すべりは1586年1月に発生した天正地震あるいはそれ以後に発生したものである可能性が大きい。雲龍寺は、古期地すべりによって形成された平坦地を選んで建立されたものであろうと推定される。

また、左岸側で縄文時代の遺物が発見された台地の部分には、基盤岩が分布せず、泥岩起源の土砂で構成されている。また、左岸側上流寄りには同じような台地が残っている。このような状況から判断し、これらの台地は、右岸側で発生した古期地すべり崩土が、当時の沢を埋積してその末端は左岸側に達した際の名残りであると推定される。すなわち、縄文時代の人々も地すべりによって形成された台地を選んで生活の場としたものと考えられる。ただし、当時はもっと広かった台地もその後の沢の侵食によって削剥され、現在はその一部を残すだけの状態になったものであろう。

### 第3節 調査結果

#### 第1トレーニング（1T）

地形図から谷を形成した流路跡と判別できる新期渓床堆積（vd1）に位置する。新期渓床堆積は、中世以降の比較的新しい時期の地すべりによる崩積土が流れ込んでいると考えられる。耕作土直下から、地山ブロックが堆積する状況を確認した。近世の耕作に伴う整地層などが断面に観察できるが、包含層・遺構・遺物は確認できなかった。

#### 第2トレーニング（2T）

地質図からは流路跡と判別でき、中期渓床堆積物（vd2）の範囲である。包含層を確認するために設定した。トレーニングの内部は、地山ブロックを含む土が堆積し、土石流・水流によって堆積した様相を呈する。包含層・遺構等は確認できなかった。

#### 第3トレーニング（3T）

2Tと同じ中期渓床堆積物（vd2）の範囲である。包含層を確認するために設定した。

トレーニングの北側に旧流路を確認した。3Tの北側を通るあぜ道は、この旧流路をトレースしていると考えられるが、流路の埋没が人為的な埋め立てであるかどうかは判断し得なかった。包含層・遺物等は確認できなかった。

#### 第4トレーニング（4T）

古期渓床堆積物（vd3）の範囲である。谷内部の堆積物を押し流した流路・痕跡から位置的にはずれており、出水等に侵食・搅乱されていない面の検出を期待できる箇所である。トレーニングは、比高差が約0.4mある2枚の川にわたる。トレーニングの南側は、3Tで述べたあぜ道が通り、北に微弱な低い段を成す。vd2とvd3はこの段を境とする。

西側の高い田では、耕土直下に地山土と黒褐色土が堆積し、耕土を水平に乗せる基盤となっている。下層には古墳時代後期の遺物を包含する黒色土層を検出した。黒色土の上面はやや明るい茶褐色を呈する。上層の黒褐色土からの遺物も含め、黒色土上面の遺物はかなりローリングを受けており、詳細な時期等は不明だが胎土から中世に帰属するであろうものも混じっている。

東側の低い田では、包含層が存在したと推定する高さまで削平を受けており、黒色土層を検出することはできなかった。しかし、地山において黒褐色土を覆土とする溝を1条検出した。トレンチ東側の低位の包含層は、低い田の造成で削られたと考えられる。

#### 第5トレンチ（5T）

4Tと同様な標高であり、位置的にも近接する。しかし、中期溪床堆積物（vd2）の範囲にあたり、3Tで検出した旧流路の延長上に位置する。

西端はvd1に一部かかることから、4Tと異なる堆積状況を予察できた。しかし、平坦面が比較的広いことから遺構の検出を期待してトレンチの設定をした。耕土の除去の結果、4Tに顕著にみられた包含層はなく、水分を多量に含む土質を確認した。これは新しい堆積と思われ、4Tとは堆積状況が異なるという予察を裏付けた。包含層・遺物は確認できなかった。

#### 第6トレンチ（6T）

堤工事の掘削範囲にかかる斜面にトレンチを設定した。この位置は鴨城・加茂ねらみ山古墳群に続く尾根の先端部に相当し、2段の小平坦面を成す。地質としては、弥生時代以前に堆積した層と考えられる古期地すべり崩土（lo）の範囲内である。第9図は南からの全景である。これに示すvd1埋没境界の付近では、前掲のloを基盤に古墳時代に掘削された横穴墓が新規溪床堆積物（vd1）で埋没している可能性を考慮し、表土を剥いで斜面の確認調査を行った。

調査範囲は尾根上の2段の平坦面のうち、下段の平坦面と上段に続く段差部を含む。平坦面は狭小であるため、土層の確認はトレンチの壁で確認することとした。また、上段へ続く段差部は、断面が観察できるまで表土を剥いだ。

平坦面の層序は表土直下に地山の黄褐色土が現れる。段差部では、平坦面で確認できた地山の上に本来堆積している黒褐色系の土が確認できた。黒褐色土のさらに上部は黒色土が堆積する。黒色土と黒褐色土の堆積はあわせて50cm以上の厚みがあり、縄文土器を包含する。黒色土と黒褐色土の時期差は不明である。

これら2面の平坦面のうち、下段平坦面には、表土直下に地山の黄褐色土が認められ、平坦部谷側の肩部には、地山由来の灰白色土と包含層の混ざった土が認められることから、包含層に及ぶ掘削・削平が及んでいることがわかり、肩部は平坦面の拡張を意識した整地層と理解できる。

上記のことから、尾根先端の平坦面は後の開墾によって、中央から谷側を切り崩して、2段に改変されたことを示している。開墾は植林のためと考えられ、切り株の大きさや年輪から、戦後のことであろう。また、vd1境界付近で行った斜面の精査で、横穴墓は確認できなかった。

地形図を俯瞰すると整形前の平坦面と同様な平



第8図 第4トレンチ全景(東)



第9図 第6トレンチ全景(南)

坦面は、谷の奥側や調査地より北側の山中に、標高も差異無くめぐることが認められる。6Tの遺物包含層と谷奥の半平坦面の間に標高の差異が無く、この間に崩壊した地形が認められることからも、元来は連続していたと考えられる。これらは、段丘状に山塊を取り巻いていたと考えられ、他の箇所でも縄文時代の包含層を検出する可能性を秘めている。

遺物は、切り通し面である段差部から、縄文土器の底部等が出土した。また、下部平坦面直下の斜面で流れ落ちたと思われる縄文時代中期の土器片が出土した。

#### 第7トレンチ（7T）

谷内部の平坦面で、包含層の有無を確認するために設定した。地質的には新期渓床堆積物（vd1）である。現状では溝田のような状況を呈する。非常にしまりのゆるい崩落土の堆積で、掘削直後より壁の崩落が始まった。包含層・遺物は確認できなかった。また、6Tで確認できた上部平坦面が崩落し、包含層の2次堆積が予測される位置であるが、それらは確認できなかった。

#### 第8トレンチ（8T）

谷の中央に張り出た地すべりが断続状に切り開かれている。中期渓床堆積物（vd2）にあたり、この部位での包含層の有無や整地の状況を確認するためトレンチを設定した。

トレンチは段に直交するように設定し、崩積土の先端部では、平坦面の方向にあわせて彎曲したL字型とした。なお、北先端部の平坦面は新期渓床堆積物（vd1）に含まれている。

堆積は、地表近くから地山に由來する人頭大の粘土のブロックを含み、大規模な地すべりを裏付ける。地すべり先端部で旧表土、あるいは包含層と推定できる黒色土層を確認したが連続性がなく、塊ごと滑り落ちてきたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

#### 第9トレンチ（9T）

地質的には、新期地すべり崩土（In）である。7T西側の斜面に設定した。7T同様に包含層の2次堆積の検出を推定していたが、確認できなかった。

#### 第10トレンチ（10T）

谷の内部は、東西の奥行き中間部で高さが大きく変わる。谷奥の「袋谷の滝」に連続する平坦面が確認できる標高45~35mの上段面と出口付近で標高29m~24mの下段面に大別できる。地質的には、上段面は中期渓床堆積物（vd2）で、下段面は新期渓床堆積物（vd1）である。10Tは上段面の下端に位置し、下段面の7Tからは約4mの比高差がある。この位置と地形から、遺構検出の可能性が少ないと推察したが、表面観察で切土による平坦面の人工的な披幅がみられるためにトレンチを設定した。

表土直下から地山由来の黄褐色粘質土が抜がる。トレンチの西側に切土が認められるため、斜面を切り開いて、作り出した平坦面と思われる。

包含層・遺構・遺物は検出できなかった。

#### 第11トレンチ（11T）

新期地すべり崩土（In）の中に位置する。斜面中に崩落した包含層等の有無と、崩落の状況を知るためにトレンチを設定した。

表層は、岩盤（Stf・Ss）に由来すると思われるややくすんだ色の土が堆積する。トレンチの下部では、砂質凝灰岩（Sd）の岩盤が露出した。トレンチ西側にみられる上層は、岩盤の上で急激に土質の様相が変わるために、このトレンチはStfとInの境目に位置すると考えられる。地表には近・現代の陶器類が散見できる。

包含層・遺構・遺物は検出できなかった。

## 第 12 トレンチ (12 T)

加茂横穴墓群では砂岩 (Ss) の岩盤に横穴墓が掘削されている。砂岩 (Ss) は谷の南側にも分布しており、横穴墓は確認されていないが、僧侶が造っていたと地元に伝えられる「籠り穴」が穿たれている。これは、古墳時代の横穴墓を改変して利用した可能性があると判断し、その痕跡を確認するために 12T を設定した。

幕前城に相当する箇所はごみ捨て穴として利用されたらしく、近世から現代の陶磁器、ガラス瓶などが玄室に相当する部分まで厚く堆積していた。これらを除去したところ、入口に向かって右手の壁に隅切りがみられ、手前に「コ」の字状の溝を検出した。溝は幅 10cm・深さ約 10cm を測る。岩盤に穿たれ、掘りなおしを 1 回認めることができた。

古墳時代の遺物や、横穴墓としての特徴を認めることができなかつたために、現時点では横穴墓として認定することはできない。しかし、詳細不明の遺構として、隅切りや溝の類例を検討し、トレンチの抵抗による現地の検証を要する。

## 第 13 トレンチ (13 T)

12T の東側に位置する。岩盤に接する平坦地で、崖縦堆積物 (dt) の範囲である。包含層の有無を確認するために設定した。トレンチの南側山沿いには、現代に至る茶見場があったということである。

これらに関連する通路等、施設の検出も事前には考えられた。

表土直下から岩盤の風化した砂質土が堆積し、出水に洗われたような形跡ではなく、倒木痕とみられる堆積の亂れを確認した。包含層・遺物・茶見場の関連施設等は検出できなかった。

## 第 14 トレンチ (14 T)

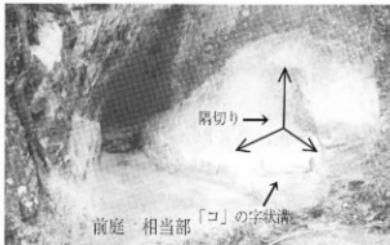
13T から水路を隔てた北側の平坦地である。谷底より高い位置関係から、中期溪床堆積物 (vd2) としている。地形利用やその時期を確認するためにトレンチを設定した。

表土直下から崩積土に類似する粘性の強い黄褐色土の堆積が認められた。しかしこの上は水平に堆積しており、下層には斜度に沿った堆積状況を呈していた。このことから水平堆積の黄褐色土は切土・整地層とするのが妥当であろう。なお、整地層より下層から土坑状の層を検出したが、遺構である可能性は低く、株の痕跡かと思われる。遺物がなく、整地がどの時期に行われたかは不明である。

## 第 16 トレンチ (16 T)

設定した位置は、地質図上で示されるように、古期地すべり崩土 (lo) の末端で、中期溪床堆積物 (vd2) を覆うように、新期地すべり崩土 (ln) が堆積している。この ln は地質報告において、1586 年 1 月の天正地震との関連を指摘している。また、第 11 図でもみられるように、樹木が上流側に不自然に傾くなど、地すべりが進行中である。現在、主な水路は、新期地すべり崩土 (ln) の末端を、東西に横切って流れている。地形としては、谷底を流れる流路が本来の姿であろうが、谷の出口南側にある畑地や民家に導水するため、高い場所を通るように人工的に掘削されたものと思われる。

この水路からは度々遺物が採集されており、前述した無縫塔はこの水路の 20m 程上流で発見されている。このことからも、水路が包含層を切って流れていると推察される。よって、第 11 図に示すように、水路の南側壁を整形し断面を観察できるようにした。この整形には、崩落による水路の埋没がないよう、配慮し



第 10 図 第 12 トレンチ全景(北)

て掘削を行った。

東西の斜度に沿った灰黄色土が幾重にも重なる状況が認められたが、標高34mと32.5m付近に溝底のような堆積を呈する薄い帶状の粘質土がみられた。また、表土直下に土坑状の堆積を確認した。この覆土から被然により赤く変色した珠洲すり鉢が出土した。

第12図は、下流側の東からトレントを撮影したものである。水路部分の湾曲が著しいことがわかる。

壁面の観察では、表土を含め約30cmの堆積があり、その下に遠拂らしき断面が確認できた。その周囲には焼土粒と思われるものを含んだ層も認められた。焼上粒は、雲龍寺が幾度か戰火にさらされたという伝承と併せて考えると非常に興味深い。

前述した標高34m付近で検出された粘質土の帶状堆積は、粘土ブロック層の上面にあたり、湧水がみられる。この粘土ブロック層は、地すべり面のひとつと考えられる。さらに下層の標高32.5m付近の暗茶褐色粘質土の帶状堆積は、観察・聞き取りから近世に至る水路の痕跡と思われる。すなわち、粘土ブロック層より上部は、近世に至る水路の上に滑り落ちてきた崩落土と考えられる。

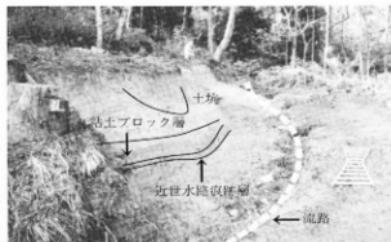
#### 第17 トレント (17 T)

谷の下部南側の耕作地部分は中期溪床堆積物(vd2)に該当する。包含層の有無を確認するためにトレントを設定した。

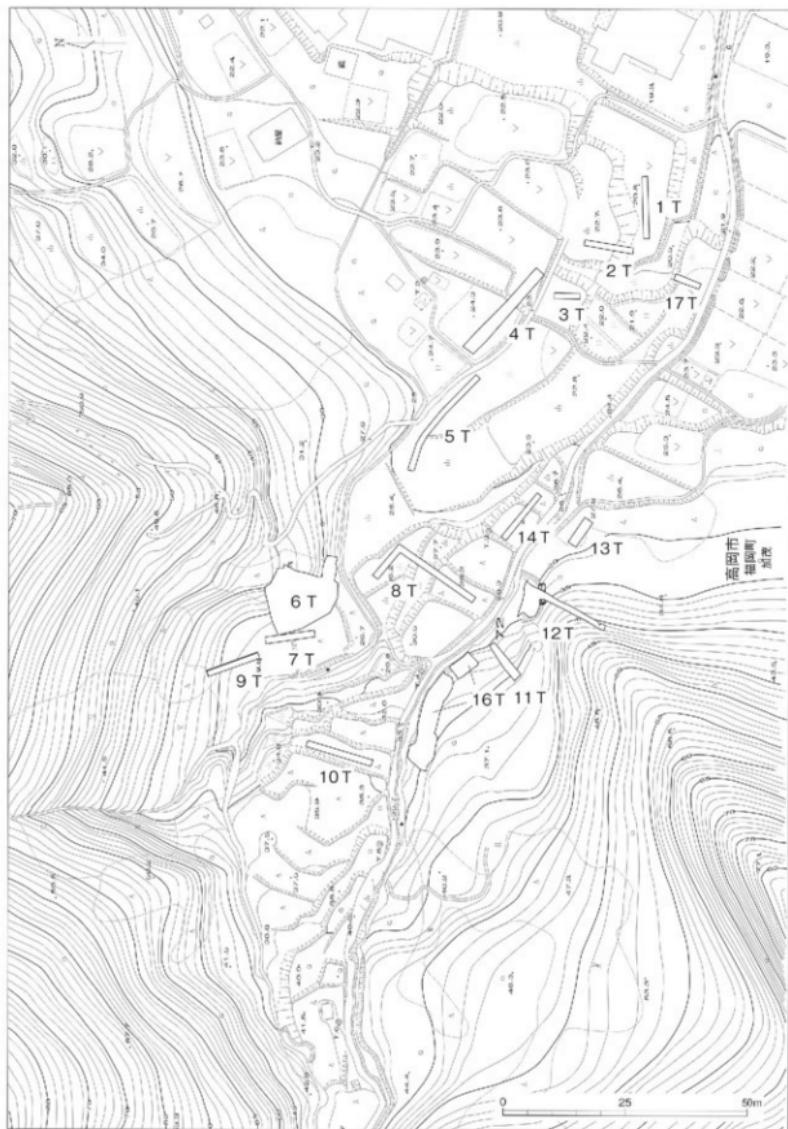
表土直下から、固くしまった粘土の地山ブロックが混じる層になる。1T・2Tと同様な谷の内部の堆積状況を呈する。包含層・遺物は確認できなかった。



第11図 第16トレント全景(北)



第12図 第16トレント全景(東)



第13図 試掘調査地区トレーンチ配置図 (1 / 1,000)

## 第3章 本調査

### 第1節 調査方法

調査範囲は堤建設の範囲である。試掘調査の第4トレンチの結果からA区、第6トレンチの結果からB区、第11・12・16トレンチの結果からC区、と調査対象範囲が決められた。各調査範囲において掘削が可能かつ、安全が確保できる箇所で調査を実施した。調査は、平成19年7月30日より開始し、空中写真撮影を10月17日に実施した。10月22日にはすべての資料を収集し現地作業を終了した。

A区は、試掘調査により古墳時代の包含層を確認しており、遺構の分布が期待できた。調査区は隣接地で耕作等がされていることから、調査の影響が及ばないように対象範囲から50cmの控えをとって設定した。調査は重機による表土掘削の後、人力による包含層掘削・精査・遺構掘削・記録作業の順に行なった。

B区は、試掘調査により縄文時代の包含層が削平されていることが判明している。しかし、削平された包含層の2次堆積部には縄文時代の遺物が含まれており、工事区域においても遺物の採集が期待できる。よって、T字区域において安全が確保できる範囲で遺物採集を目的とし、B区の掘削を行なった。掘削は人力で行ない、環境面では隣接する水路に鉄板等で覆いをして掘削土が流入しないように配慮した。

C区は、試掘調査において中世に至る遺物が出土したことから、伝雲雀寺に関連する遺物・遺構の検出が期待できる。試掘調査では、水路に面する部分に土坑状の堆積を確認し、水路の上部平坦面では狹小な犬走り状の平坦面がみられた。このことから水路の上部平坦面を面的に調査することとした。しかし、地質調査により、地すべり崩土の末端部で軟弱な地盤であることが判明しており、調査区外で倒木・崩壊を引き起こすおそれのある大きな掘削を加えないこととした。調査区の設定は犬走り状の平坦面を含む範囲に留め、水路側の崖には転落防止の安全柵を設置した。調査着手以降は日々目視による地形変状のチェックを行なった。掘削は人力で行い、ベルトコンベアを用いて水路をまたいで掛上の搬出をした。

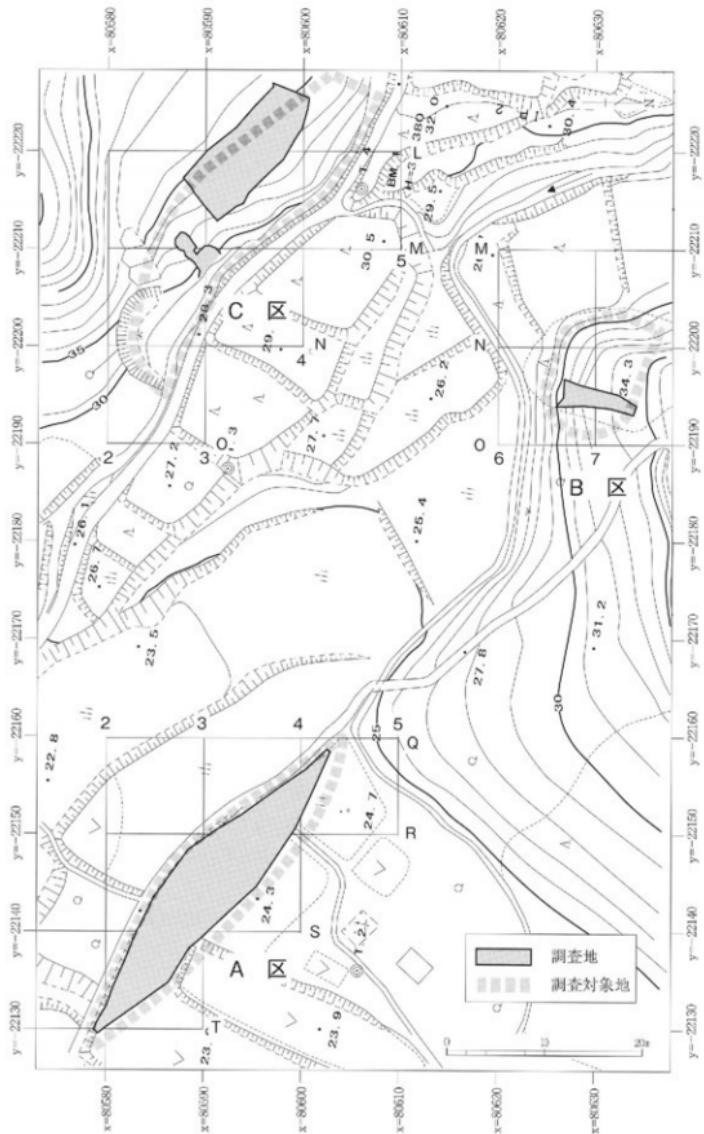
なお、試掘第12トレンチの調査で、古墳時代の横穴墓の残穴である可能性が高い遺構が検出されている。この結果をふまえ、C区から砂岩層(Ss)を表上直下に確認した試掘第11トレンチまでの間で砂岩層を露出させ精査することとした。掘削は、重機と人力を併用して行なった。

記録作業は、国土座標において10mごとの数値でメッシュを設定し、地区割はX軸に数字・Y軸にアルファベットを割り当て、X=80600を4ライン・Y=22200をNラインとした。グリッド名は東南の杭名を使用した。

記録は、以下に基づいて行なった。

・測量はKNO.14(X=80475.4616 Y=22074.1268 Z=18.335)を基準とした。

・土色は、「新版 標準土色誌」 - 農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修 - (発行:日本色研事業振)に基づいて記録した。



第14図 本調査地区割図 (1/500)

## 第2節 調査結果

### 1. A区

試掘調査第4トレンチの結果から、包含層は耕土直下にあり、地山において遺構を検出できることが判明している。

A区は3枚の耕作地にかかる。それぞれ高低差があり、耕土直下の様相も異なる。調査は試掘で判明した包含層上面まで重機で掘削し、包含層の平面的な折りがりを確認するために入力による精査を行なった。

包含層は南から北へ緩やかに傾斜しているため、南北方向のベルトを設定し、掘削を進めた。包含層からは古墳時代後期の遺物が出土した。覆土には、地山に由来する大小の粘土ブロックを含む。下層にいくにつれ、粘土ブロックが大きく、間隔が密になることから、この堆積は沿地状の黒色土の堆積に、崩壊した地山が流れ込んで沈殿したか、山の崩壊に伴って地山ブロックとともに黒色土が流れ込み、地山ブロックが沈殿して形成されたと推察できる。いずれにせよ、包含層の形成は湿地の状況を経たと考えられる。

遺構の検出は、包含層上面からの掘り込みを確認するため精査を行なった。これは、試掘調査で出土した遺物に年代的な幅があるためである。精査の結果、かすかに茶色の強い土がピット状に検出されたが、プランを確定するに至らず、結局、包含層をほぼ完掘しなければ不明瞭であった。このことから、包含層の堆積後に遺構が展開しているといえる。溝やピットの覆土には、包含層土ブロックの密度が低い状況を観察することができた。

検出した遺構は次のとおりである。

溝 (SD301・SD302)

中段で並行して検出され、いずれも幅最大50cm・深さ50cmを測る。途中、試掘時の搅乱で途切れるが、SD301のみ最大12mの長さで検出した。

柵列 (P507～P505・502～P504)

溝より北に3mのところで溝に並行して2列検出した。

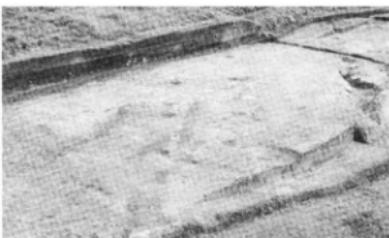
遺構に伴って遺物が出土していないために時期は不明である。

小結

試掘調査において確認した包含層は、古墳時代後期の土器を含むものの、その形成過程において、人の活動には不適である。遺構は、包含層が乾地化したあとに構築されたものと考えられる。



第15図 A区溝検出状態(西)



第16図 A区柵列検出状態(西)

柵列と溝は、ほぼ同一の主軸を取ることからセットであると思われる。溝と柵列間を 4.4m としたものが、軸を 1.5m 南北にずらして、2 時期に設置されていたものと考えられる。

A 区北西側の尾根上には鴨城が構えられている。鴨城は南北朝時代に史料に登場し、戦国時代にも活用された城である。出丸に相当する C 郡は A 区の直上に位置する。よって、A 区は鴨城の真正面であり、城へ続く最短ルートの入り口にあたる。短絡的に鴨城に関連する柵・溝とする結論は出せないが、考慮すべき事項であろう。

## 2. B 区

調査区は、堤堤工事計画にかかる部分である。縄文時代の包含層を検出した試掘第 6 トレンチを 1.5 m 東側に拡張し、遺物の収集を図った。

第 17 図は南西からの全景である。調査は、下段平坦面の東側と平坦面拡張のために包含層を切り崩して押し出した整地層を対象とし、尾根先端の既掘部分を含む。

下段平坦面は、表土直下に地山の灰白色土を認める結果となった。その肩部は、地山由来の灰白色土と包含層の混ざった土が認められ、平坦面の拡張を意識した整地層であることを確認した。

遺物は数点を数えるのみであった。



第 17 図 B 区全景(南西)

## 3. C 区

第 18 図は着手前の C 区を東から俯瞰したもので、斜面地に犬走り状の平坦面を観察できる。これが人工的なものかどうか、試掘報告で検出した土坑状の堆積を平面的に確認することが C 区の主な目的である。

犬走り状の平坦面は斜面に直交し、幅約 1 m で長さ 14 m にわたって認められる。下段との比高差は下流側で 1.5 m である。上流側では同じ標高の部位に合流して消える。このような平坦面は地すべりによる地形と判別が困難であり、それも念頭において調査を実施した。

調査区の堆積状況を平面的に観察すると、表土直下に試掘第 11 トレンチで検出した暗オリーブ褐色土を基調とする地すべり崩土が現れる。また、下段の平坦面を精査すると、包含層の可能性を考えていた暗灰黄色土が斜面と同様の傾きを呈して肩部に現れることを確認した。この暗灰黄色土の



第 18 図 C 区着手前(東)

延長は、試掘第16トレンチで報告した遺構状の断面と同一である可能性が高い。また、焼土粒と思われる赤褐色土粒を含み、遺物を包含する堆積も確認していたが、今回の調査では遺構として確認できなかった。このように、試掘第16トレンチの断面に現れていた遺構状の堆積は、上記の暗灰黄色土をベースとしていることからも、斜面を覆う崩落堆積の一部とするのが妥当であろう。

C区周辺は、ごく最近の水路を覆うように地形が成立していることから、これらは極めて近年に形成された地すべり地形であることが考えられる。犬走り状の平坦面はこの地形を切って造成されており、その時期は地すべり以降となる。よって、B区にみられたような、植林に関するものと解釈するのが妥当であろう。遺物・遺構とともに検出できなかった。



第19図 C区完掘状況(東)

#### 4. 横穴墓

試掘第12トレンチでは、砂岩盤を掘り込み、そこに隅切りを施す遺構の痕跡を検出した。対面する尾根筋に加茂横穴墓群が存在し、谷をはさんだ南側の尾根にも横穴墓が存在する可能性を考え、前述した遺構が崩落した横穴墓の裏壁の一部ではないかと推測した。そこで、南尾根における横穴墓の分布を確認するため、表土直下に岩盤を検出した試掘第11トレンチから試掘第12トレンチまでの間で横穴墓の検出を試みた。

その結果、試掘トレンチのすぐ東側の岩盤に馬蹄形に凹む地形を検出し、これが天井部の崩落した横穴墓らしいことを確認した。しかし、鋤削を行っても横穴墓に伴う遺物は出土しなかった。以下は遺構の状況から横穴墓と推定し、それに従って記述する。

検出された横穴墓は、天井部と奥門部が失われている。岩盤を覆う土層は単純な自然堆積で、しまりもなく砂質である。また、調査着手前にはちょうど杉の切り株が存在していた。周囲の植林状況から他の調査地と同様に戦後のものと思われる。凹地に流入している土は岩盤を覆う土と同様にしまりのない砂質土で、極めて新しい堆積の印象を受けた。この流入土を除去した後に、凹地の中心を軸とし、推定玄室の中央部で直交するベルトを設定し、内部の堆積状況を記録した。

##### 墓前域

確認した奥行きは130cmを測る。墓前域から奥門に至る地盤は急角度で立ち上がるためか、数センチの厚みで岩盤直上を覆う堆積以外、古いと思われるものはほとんど認められなかった。岩盤まで掘り下げ、



第20図 横穴墓着手前(北)

精査すると工具痕を確認することができた。工具痕は幅約30cmを測り、刃先の形状は削円の方形であろう。小刻みに連続した状態が第21図でも観察できる。東側壁に沿って深さ約10cmの排水溝が認められた。肩ははっきりしないが、墓前域で確認した工具痕の幅と溝底の幅はほぼ一致する。

#### 羨門

羨門は玄室床面まで失われている。しかし、墓前域にみられた工具痕が東側壁に沿って羨門と思われる部位まで延びること、排水溝が東側に沿うことから、この位置が開口部であるとした。よって、平面形は片袖と考えられる。推定復元した長さは50cm・幅60cmを測る。

#### 玄室

玄室内は床面近くに細砂を基とする層が認められる。側壁や奥壁の立ち上がり部にはボットホールのような水による著しい侵食がみられた。侵食された部分には、細砂と5cm大の円礫がつまっていた。円礫の上面はすべて同一の高さを呈していた。よって、床面近くの細砂は人為的に敷かれたものではなく、水流によるものと判断する。これらは、天井の崩落後に流れを伴うような水の浸入があったことを示している。

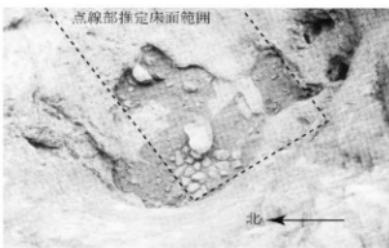
天井部の崩落に伴う岩盤・岩塊の堆積が皆無であったのもこのような要因によるものと思われる。側壁や奥壁に玄室の上部構造をうかがい知る痕跡はみつからなかった。推定復元による奥行きは160cmで、幅は120cmを測る。

#### 遺物

水の浸食による穴から、鉄釉のかかった瀬戸美濃の天目茶碗の破片が出土している。一部の破片にはローリングによる磨滅がみられることから、土砂の流入とともに流れ込んだものと判断する。



第21図 墓前域工具痕



第22図 玄室奥(垂直)

## 第4章 遺物

遺物は、試掘調査と本調査とあわせコンテナ2箱刷出土している。試掘調査時の出土遺物も、本調査の調査区にあわせて報告する。

### 1. A区

A区からはコンテナ1箱刷の土器が出土しているが、遺構に伴うものではなく、すべて包含層の遺物である。土器は、ローリングを受けており、残存状態が非常に悪い。団化できるものは須恵器のみであった。

A 1～4は須恵器壺蓋である。A 1はつまみ部のみである。直径28cmの扁平なボタン状を呈し、中央がやや隆起する。A 2は復元径が15.2cmを計り、A 3・4よりも扁平で口縁端部を丸くおさめる。A 3は復元径が15.6cmを計り、口縁端部がややとがる。A 4は復元径が12.6cmで頂部にやや厚みがある。口縁端部はやや外に開く。調整は頂部はヘラケズリで端部から内面にかけロクロナデを施す。

A 5～8は須恵器杯である。A 5は口縁部で、口径11.8cmである。斜め上方に薄く引き上げられた後、端部外側をやや強くナデでおさめる。A 6は無台杯である。底径は7.8cmを計る。A 7・A 8是有台杯である。A 7は底径12.5cmを計る。A 8は底径9cmを計り、高台は強いナデによって凹みをなす。高台内は高台を貼り付けた後に軽くナデしている。

A 9は水瓶の底部である。底径は14.1cmを計る。ところどころ火ぶくれがみられ、器壁も厚い。高台貼り付け後に軽いナデを施す。高台の接地部分内面に剥離痕がみられる。

A 10～12は須恵器壺の口縁部である。いずれも口縁部内面に強い稜線が1条めぐりロクロナデする。外側には圓線を入れ、4条からなる櫛推波状文を測線の上下に配する。圓線は櫛推波状文に切られる。A 12は試掘時の遺物である。口径の復元径が48cmである。

A 13・A 14は土師質の管状土錐である。A 13は摩滅して若干やせている。長さ3.1cm幅2.2cm、穴の最大径は1cmを計る。A 14は卵形を呈し、長さ4.1cm幅3.4cm、穴の最大径は1cmを計る。

須恵器の時期は、概ね8世紀中頃と推測できよう。しかし、出土した土師質土器の中には、胎土から中世土師器と思われるものも混じる。ゆえに包含層の出土遺物については古代～中世とする。

### 2. B区

繩文土器が、試掘調査時に出土している。口縁部2点(B 1・B 2)、底部(B 3)と胴部破片(B 4)が各々1点である。他にも破片が多く出土している。

B 4の出土位置は整地層の範囲で層位は表土直下である。B 1～B 3は段差部の隙合中に出土した。下層の黒色土より各々離散して出土している。

B 1・B 2は器種不明の口縁部破片である。B 1は平口縁でやや外傾気味に開き、無文で丁寧にナデしている。B 2は平口縁で開き気味であるがほぼ直立し、外面に繩文が施されている。B 3は底部に網代組の織維圧痕が残存する。摩滅しているが、組目は「2本起1本潜1本送」が認められる。B 4は、深鉢の胴部であろう。半截竹管による半降起線文で縦線と曲線を引く。縄文時代中期前業の新崎式とみられる。

図示した土器の中で時期が判明したのはB 4のみであり、その時期を縄文時代中期前業とした。他の土器は器形や文様が判然とせず、詳細な時期は不明であるが、B 4と同じく中期の範疇に比定できるものと考える。しかし、B 4は削平土から出土し、他の土器と状況が異なっている。一括として扱うには少々危険であることも加味する必要があろう。

### 3. C 区

試掘調査時に、須恵器・珠洲擂鉢が出土した。C 1は須恵器壺の底部破片である。試掘第16トレンチの西端部、黒色土から出土した。底径は10.8cmを計り、底部から胴部にかけナデしている。底部内面と胴部外面には自然釉がかかる。C 2は珠洲の擂鉢である。試掘第16トレンチの遺構状の堆積から出土した。6条1単位の撚目が3.5cm間隔で施される。2次的な熱を受け赤色に変色している。

須恵器壺は、詳細な時期は不明である。珠洲の擂鉢については15～16世紀に収まるであろう。

### 4. 横穴墓

C 3は瀬戸美濃産の天日茶碗である。口縁部のみ、玄室内で出土した。口径は11.0cmである。胎土は明るい肌色を呈し、精良である。一部の破片にはローリング痕がみられる。

## 第5章 結語

### 1. A区

A区は、古墳時代の包含層を検出した試掘結果とその立地から、加茂横穴墓群の造営に関連する施設の検出を推定し、本調査を行った。

調査の結果、地すべり崩壊に由来すると思われるこぶしだいの地山ブロックが堆積している状況が明らかとなり、A区の古墳時代後期の地形環境は湿地であったと結論づけた。その後、時期について不明だが乾燥の状態となった際に南北方向の柵列と溝による山側と谷側に区画割が行われたものと考える。この柵列と溝については、何に関連するのか明らかにする結果は得られなかったが、直上に位置する鶴城に関連する施設と想定することもできよう。

### 2. B区

B区は、縄文時代中期の土器が試掘調査時に出土し、縄文時代の良好な包含層を確認していた。本調査では、包含層が残存している箇所が調査区外となつたため、包含層を削平した整地層内に含まれる遺物の同収を目的とした。

遺物がほとんど出土しない結果となつたが、試掘結果やこの包含層を有する地形が西山丘陵を取り巻くように存在することをふまると、周辺地域における縄文時代の遺跡を考える上での指標となり得るだろう。

### 3. C区

C区は、地表の観察から遺構の可能性が考えられていた犬走り状の平坦面と試掘調査で確認した遺構とみられる堆積の平面調査を目的として本調査を行った。

調査の結果、地表で確認されていた狭小な平坦面は表上直下よりその造成面が確認できたため、新しいものと判断せざるを得なかつた。また、地すべり地内の調査であるため掘削が制限されたが、試掘調査で確認した遺構とみられた堆積は、傾斜地を覆う自然堆積の一部との結論に至つた。

### 4. 横穴墓

墓前域工具痕 墓前域の工具痕はいつの時代による造作かは不明である。玄室から甬道を経て墓前域に

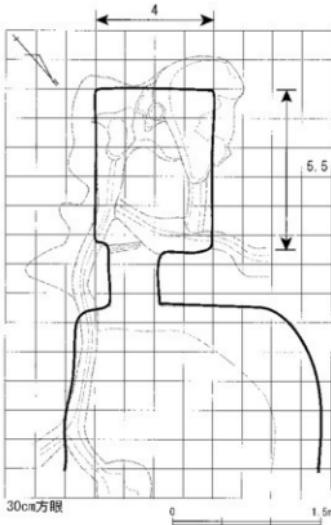
至る面では、緩やかに下がるものが多くを占めている。狭道から墓前域へ段をなして下がるものもあるが、検出遺構の墓前域面は梢円に抉られ、湾曲しており、垂直や水平を削りあげる意図は認められない。このことは、築造当時の工具痕として疑問を拭えない。

なお、工具痕は一定の角度で連続しており、振り上げて打ち込む動作ではなく、岩盤を刻むように削り取る動作が推定できる。この動作に適した工具を推測すると、打鍬のように適度に岩盤に食い込む重さがあるものと考える。

調査で検出した遺構は、前述したように、横穴墓とするのには決定的な要素に欠けている。横穴墓に関連する遺物が皆無であったこと、平面的なプランは横穴墓のそれに当たるが、崩落している犬井や壁の痕跡をまったく窺い知ることができなかつたことが根拠となる。横穴墓とするには不可欠な要素である時期の決定と横穴の構造を欠いた結果となつた。西山丘陵全体に横穴墓が分布する立地的条件や安定した岩盤という地質的条件を満たしたとして推定の域を脱し得ない。

以上のように本調査において、この遺構が横穴墓か否かの結論を出すことはできなかった。だが、積極的に横穴墓の残れとして扱い、横穴墓築造企画研究の俎上に乗せて検討することが必要と考える。

**検討** 検出された遺構は、玄室の奥行き 165cm、幅 120cm、玄門幅 50cm、長さ 50cm を測る。狭道の取り付けが、玄室に向かって左に偏心し、片袖の平面形を呈する。これは越中に所在する横穴墓の特徴とされる T 字形玄室平面図の範疇であり、阿尾瀬戸ヶ谷内 4 号横穴墓・頭川城ヶ平第 14 号・第 17 号などの類例が挙げられる。池上悟氏は、横穴墓の形状・規模と時期に関して「相対的に時期の下降とともに矩形・長方形化とともに小型化する」としている（池上悟「日本の横穴墓」、西井龍儀他 2005 「ふくおかの飛鳥時代を考える」所収）。今回検出した横穴墓の規模は、時代を打った横穴墓の範囲内である。遺構の復元案においても最低限の埋葬空間を確保し、規模や狭道の偏心は横穴墓であることを否定する要素にはならない。よって、この遺構を横穴墓と断言できないものの、周辺の横穴墓群を検討する際には視野に入れるべきであろう。



第 23 図 方眼操作による横道上の企画 (1 / 50)

## 参考文献

- 大野 究 1989 『脇方横穴群』 富山県水見市教育委員会
- 栗山雅夫 2005 『富山県福岡町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ』 富山県福岡町教育委員会
- 栗山雅夫 2007 『富山県高岡市福岡町埋蔵文化財分布調査報告V』 富山県高岡市教育委員会
- 坂井誠一他 1974 『角川日本地名大辞典16－富山県』 角川書店
- 高岡 徹 2001 『富山県福岡町中世城館調査報告』 富山県福岡町教育委員会
- 高岡 徹他 2006 『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』 富山県埋蔵文化財センター
- 高瀬重雄他 1994 『日本歴史地名大系第11巻－富山県の地名』 平凡社
- 田嶋明人 1971 『横穴構造と築造上の企画』『法皇山横穴古墳群』 石川県加賀市教育委員会
- 西井龍儀他 2005 『ふくおかの飛鳥時代を考える』 富山県福岡町教育委員会・富山考古学会
- 辺見 謙 1983 『富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群第Ⅰ次緊急調査報告』 富山県高岡市教育委員会
- 辺見 謙 1984 『富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群第Ⅱ次調査報告』 富山県高岡市教育委員会
- 水島 茂他 1969 『福岡町史』 富山県福岡町役場
- 森田柿岡 1951 『越中志微』 富山新聞社（1973年復刻版）

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	てらやちいせき・てらやちよこあなはちょうさほうこく						
書 名	寺谷内遺跡・寺谷内横穴墓調査報告						
副 書 名	平成19年度、岸谷川砂防改良事業に伴う調査						
巻 次							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第19冊						
編 著 者 名	中井英策、野崎 保、山口辰一						
編 集 機 間	高岡市教育委員会						
所 在 地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号						
発行年月日	西暦 2009年2月20日						
ふりがな 所 収 遺 跡	所 在 地	コ デ ィ フ 市町村	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積	調査原因
寺谷内遺跡 寺谷内横穴墓	富山県高岡市 福岡町加茂	16202 422100	36° 43° 31°	136° 55° 5°	070706 775m <sup>2</sup> 071019		岸谷川砂防改良事業
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 槽	主 な 遺 物	特 記 事 項		
寺谷内遺跡	散 布 地	縄文時代	包含層	縄文土器			
寺谷内横穴墓	横 穴 墓	古墳(飛鳥時代)	横穴墓	須恵器			
		古代～中世	排列 溝				

図 面

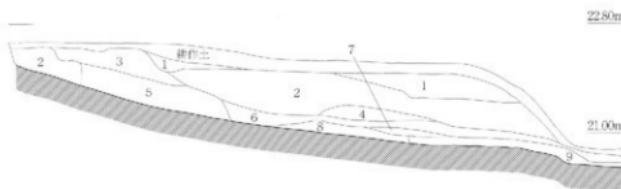
## 図面目次

- 図面01 遺構実測図 試掘トレンチ上層図〔1〕 1. 第1トレンチ北面 縮尺1/80  
2. 第2トレンチ東面 縮尺1/80  
3. 第3トレンチ東面 縮尺1/80
- 図面02 遺構実測図 試掘トレンチ土層図〔2〕 1. 第4トレンチ北面 縮尺1/80  
2. 第5トレンチ北面 縮尺1/80
- 図面03 遺構実測図 試掘トレンチ土層図〔3〕 1. 第6トレンチ東面 縮尺1/80  
2. 第7トレンチ東面 縮尺1/80
- 図面04 遺構実測図 試掘トレンチ上層図〔4〕 1. 第8トレンチ西面 縮尺1/80  
2. 第10トレンチ東面 縮尺1/80
- 図面05 遺構実測図 試掘トレンチ土層図〔5〕 1. 第9トレンチ東面 縮尺1/80  
2. 第11トレンチ南東面 縮尺1/80
- 図面06 遺構実測図 試掘トレンチ土層図〔6〕 1. 第13トレンチ北面 縮尺1/80  
2. 第14トレンチ南面 縮尺1/80  
3. 第17トレンチ西面 縮尺1/80
- 図面07 遺構実測図 試掘トレンチ上層図〔7〕 1. 第16トレンチ南面 縮尺1/80
- 図面08 遺構実測図 A区全体図 縮尺1/200
- 図面09 遺構実測図 A区実測図〔1〕 1. SD301・302・304平面図 縮尺1/80  
2. SD301・302土層図 縮尺1/40  
3. SD301・304土層図 縮尺1/80
- 図面10 遺構実測図 A区実測図〔2〕 1. 横列1、2平面図・断面図 縮尺1/80  
2. A区北壁土層図 縮尺1/100
- 図面11 遺構実測図 横穴墓全体図 縮尺1/100
- 図面12 遺構実測図 横穴墓実測図 縮尺1/40
- 図面13 遺物実測図 A区出土遺物 須恵器(縮尺1/3)・土鍾(縮尺1/2)
- 図面14 遺物実測図 繩文土器等(縮尺1/3)



- 1 : 2.5Y 4/2-4/4 噴灰黃色土 緩まりやや強い。粘性やや強い。  
 2 : 2.5Y 5/1 貴灰色土 緩まり弱い。粘性やや強い。  
 3 : 2.5Y 3/1 黑褐色土 緩まりやや強い。粘性やや強い。  
 4 : 2.5Y 5/1 黄灰色土 緩まり弱い。粘性強い。  
 5 : 2.5Y 7/4 淡黃色土 緩まりやや弱い。粘性やや強い。

### 1. 第1トレンチ北面



- 1 : 2.5Y 4/2-4/4 噴灰黃色土-オリーブ褐色土(粉疊層) 緩まりやや弱い。粘性やや強い。  
 2 : 2.5Y 5/1 黄灰色土(土石流跡) 緩まり弱い。粘性強い。  
 3 : 2.5Y 5/1 黄灰色土 緩まりやや弱い。粘性強い。  
 4 : 2.5Y 5/1 黄灰色土 緩まりやや弱い。粘性強い。ブロッカ土少量含む。  
 5 : 2.5Y 5/1 黄灰色土 緩まり弱い。粘性強い。4より裏にブロッカ土含む。  
 6 : 2.5Y 7/8 黄色土(土石流跡?) 緩まり弱い。粘性強い。鉄分多く含む。  
 7 : 2.5Y 5/1 貴灰色土 緩まり弱い。粘性強い。  
 8 : 2.5Y 5/1 貴灰色土 緩まり弱い。粘性強い。  
 9 : 2.5Y 4/1 貴灰色土 緩まり弱い。粘性強い。

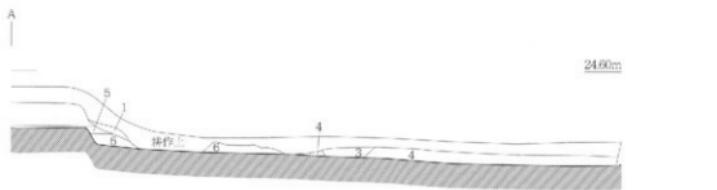
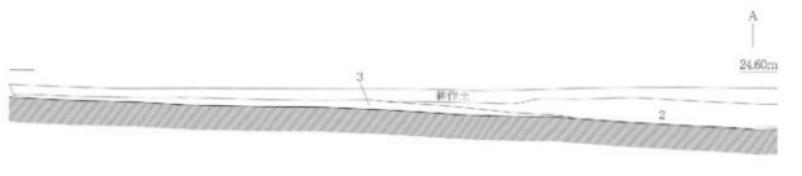
### 2. 第2トレンチ東面



- 1 : 2.5Y 4/1 貴灰色土 緩まり弱い。粘性やや強い。(耕作による板化)  
 2 : 2.5Y 5/1 貴灰色土 緩まり弱い。粘性強い(土石流跡)。

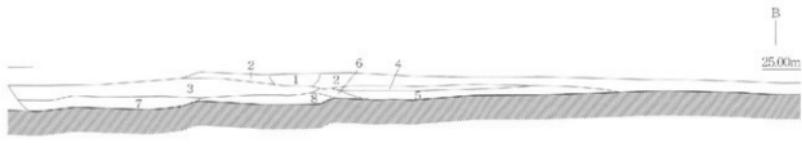
### 3. 第3トレンチ東面

図面〇二  
遺構実測図



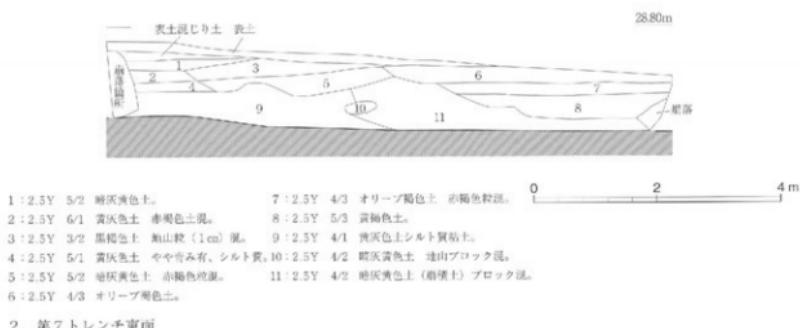
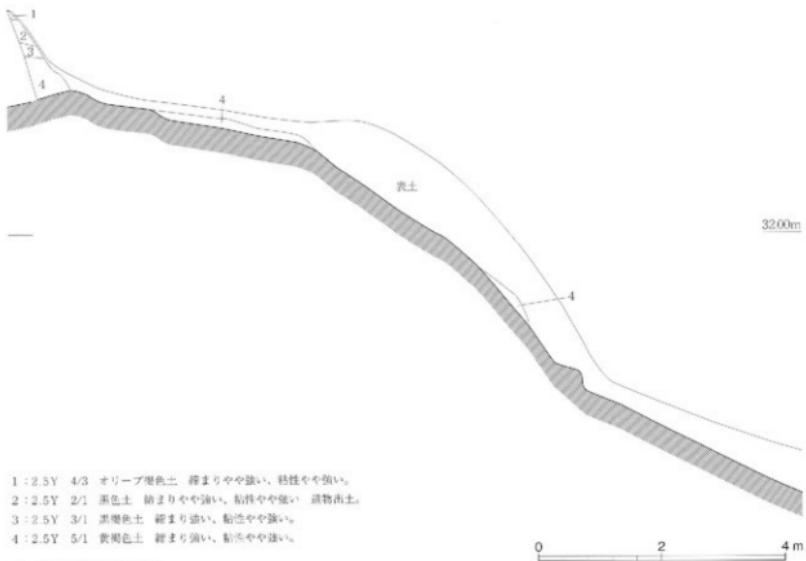
- 1 : 2.5Y 4/4 オリーブ褐色土 硬まり弱い、粘性やや強い。
- 2 : 2.5Y 3/1 貫入色土（堅地層） 硬まりやや強い、粘性強い。
- 3 : 2.5Y 2/1 黒褐色土 硬まり弱い、粘性強い。ブロック土含む。
- 4 : 2.5Y 6/6 明黄褐色土 硬まり弱い。
- 5 : 2.5Y 3/1 黑褐色土 硬まり弱い、粘性強い。
- 6 : 2.5Y 7/6 明黄褐色土 硬まり弱い、粘性やや強い。ブロック土含む。

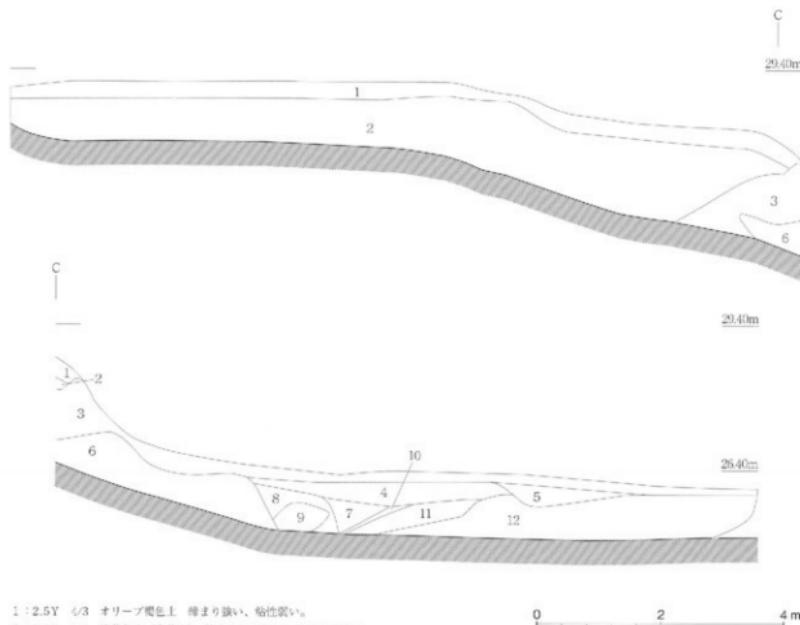
1. 第4トレンチ北面



- 1 : 2.5Y 3/2 黑褐色土 硬まり弱い、粘性弱い。
- 2 : 2.5Y 4/3 オリーブ褐色土 硬まりやや弱い、粘性弱い。
- 3 : 2.5Y 4/3 オリーブ褐色土 硬まり強い、粘性やや弱い。
- 4 : 2.5Y 3/3 貫入色土 硬まり弱い、粘性弱い。
- 5 : 2.5Y 5/5 壤浜黄色土 硬まり弱い、粘性弱い。
- 6 : 2.5Y 6/3 にぶい貫入色土 硬まり弱い、粘性強い。
- 7 : 2.5Y 5/5 壤浜黄色土 粘性弱い、ブロック土含む。
- 8 : 2.5Y 6/6 明黄褐色土 硬まり弱い、粘性やや強い。

2. 第5トレンチ北面





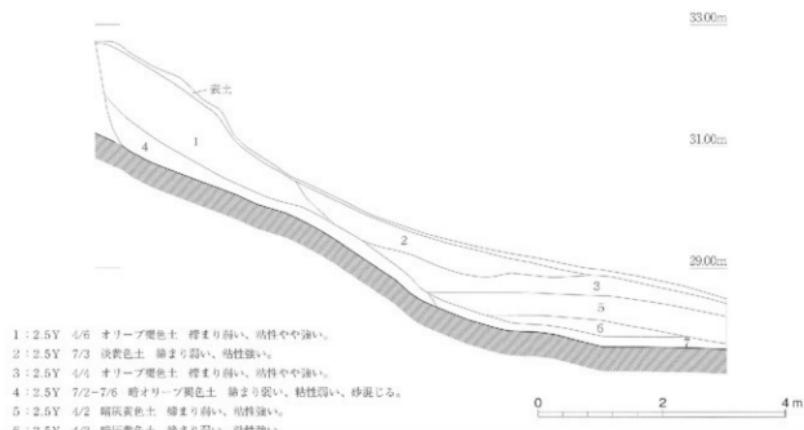
- 1 : 2.5Y 6/3 オリーブ褐色土 稲まり強い、粘性弱い。  
 2 : 2.5Y 8/4 黄褐色土 (海崖土) 稲まりやや強い、粘性やや強い。  
 3 : 2.5Y 4/6 オリーブ褐色土 (田畠土の崩壊土) 稲まり強い、粘性弱い。  
 4 : 2.5Y 4/4-4/6 オリーブ褐色土 稲まり強い、粘性弱い、ブロック土多く含む。  
 5 : 2.5Y 5/6 黄褐色土 稲まり強い、粘性弱い、ブロック土含む。  
 6 : 2.5Y 7/1-7/3 淡白色土~淡黄色土 稲まり弱い、粘性やや強い。  
 7 : 2.5Y 3/2 黑褐色土 稲まり弱い、粘性強い、ブロック土含む。  
 8 : 2.5Y 4/6 オリーブ褐色土 (田畠土の崩壊土) 稲まり強い、粘性弱い、ブロック土含む。  
 9 : 2.5Y 3/2 黑褐色土 稲まり強い、粘性弱い。  
 10 : 2.5Y 5/6 黄褐色土 稲まりやや強い、粘性やや強い、ブロック土含む。  
 11 : 2.5Y 4/6 オリーブ褐色土 稲まりやや強い、粘性やや強い、ブロック土含む。  
 12 : 2.5Y 7/3 淡黄色土 稲まり強い、粘性弱い、ブロック土含む。

1. 第8トレンチ西面

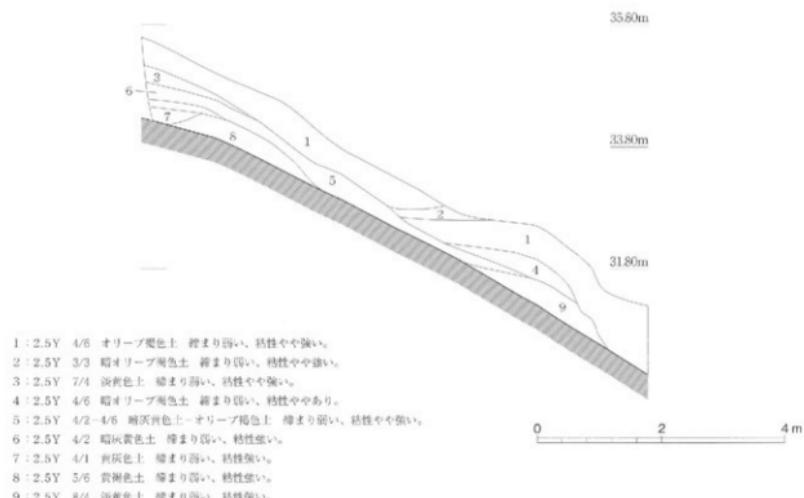


- 1 : 2.5Y 6/3-6/6 にじい黄色土~明黄褐色土 稲まり弱い、粘性強い、亜分含む。  
 2 : 2.5Y 5/6 黄褐色土 稲まり弱い、粘性やや強い。  
 3 : 2.5Y 2/6 明黄褐色土 新まり弱い、粘性やや強い、ブロック土含む。

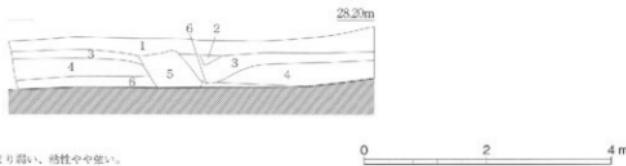
2. 第10トレンチ東面



1. 第9トレンチ東面

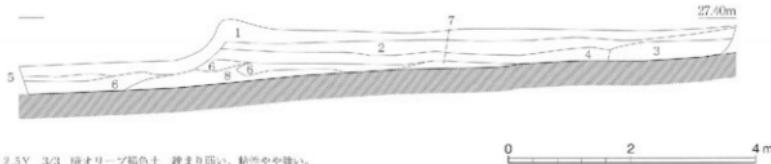


2. 第11トレンチ南東面



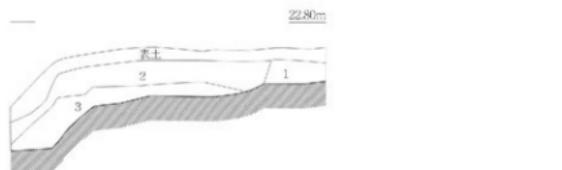
- 1 : 2.5Y 5/4 黄褐色土 滲まり弱い、粘性やや強い。  
 2 : 2.5Y 5/4 黄褐色土 滗まり弱い、粘性やや強い。  
 3 : 2.5Y 3/3 緑オリーブ褐色土 滗まり弱い、粘性やや強い。  
 4 : 2.5Y 5/4 黄褐色土 滗まり弱い、粘性ややあり。  
 5 : 2.5Y 3/3 緑オリーブ褐色土 滗まり弱い、粘性やや強い。  
 6 : 2.5Y 4/3 オリーブ褐色土 滗まり弱い、粘性やや強い。

#### 1. 第13トレンチ北面



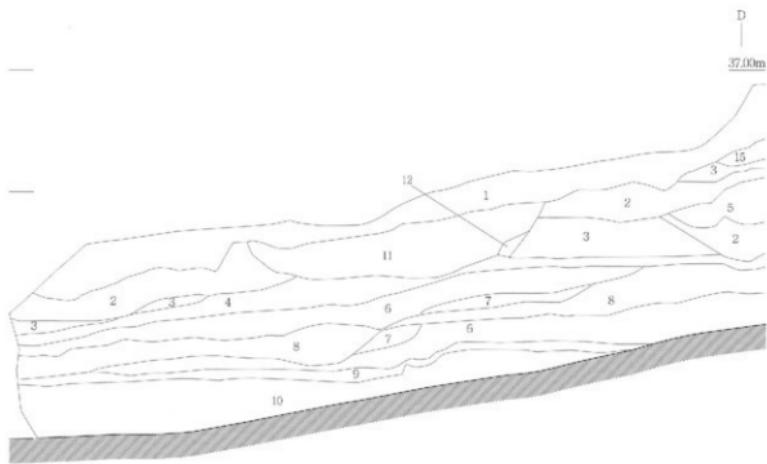
- 1 : 2.5Y 3/3 緑オリーブ褐色土 滗まり弱い、粘性やや強い。  
 2 : 2.5Y 5/3 黄褐色土 滗まり弱い、粘性やや強い。  
 3 : 2.5Y 7/1 灰白色土 滗まり弱い、粘性やや強い。  
 4 : 2.5Y 6/1 黄褐色土 滗まり弱い、粘性やや強い、2より粘性強い。  
 5 : 2.5Y 4/3 オリーブ褐色土 滗まり弱い、粘性やや強い。  
 6 : 2.5Y 6/3 にぶい黄色土 滗まり弱い、粘性やや強い、ブロック土含む。  
 7 : 2.5Y 6/1 黄褐色土 滗まり弱い、粘性やや強い。  
 8 : 2.5Y 5/6 黒褐色土 滗まり弱い、粘性やや強い。

#### 2. 第14トレンチ南面



- 1 : 2.5Y 4/3 オリーブ褐色土 滗まり弱い、粘性強い、ブロック土含む。  
 2 : 2.5Y 5/3 黄褐色土(堅冰層) 滗まり強い、粘性強い、ブロック土多く含む。  
 3 : 2.5Y 5/1 黄褐色土 滗まりあり、粘性強い、ブロック土多く含む。

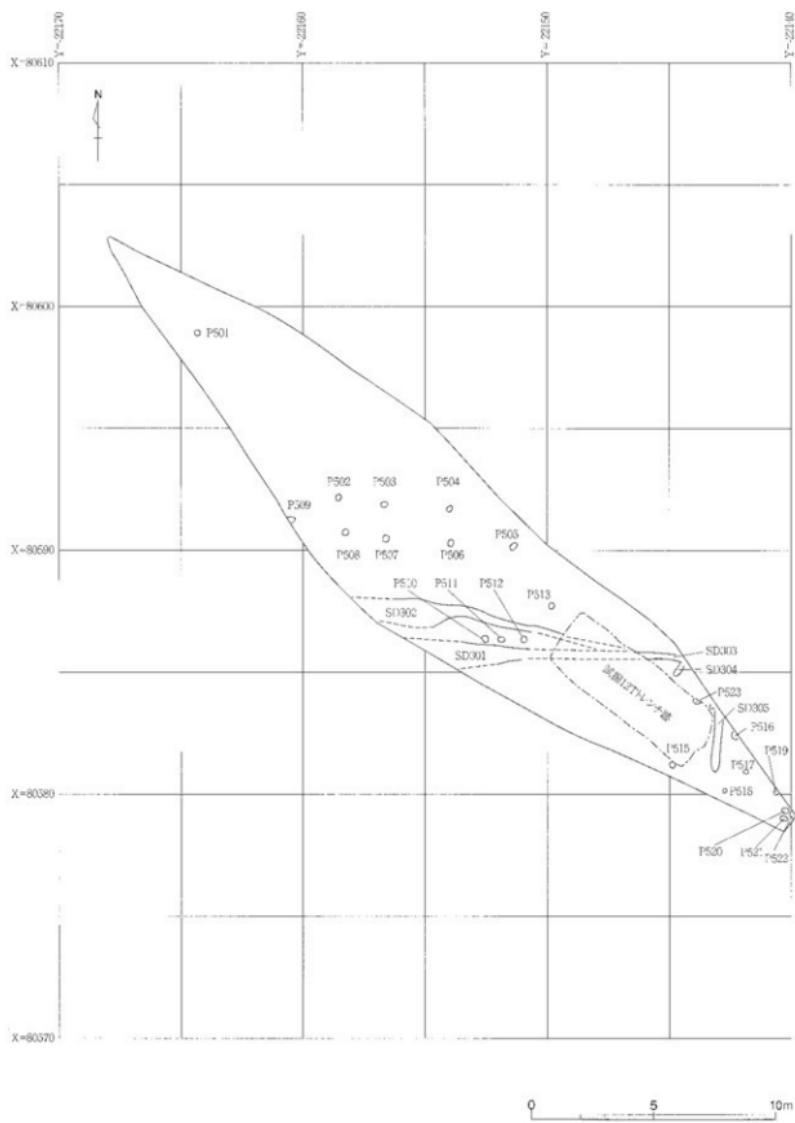
#### 3. 第17トレンチ西面



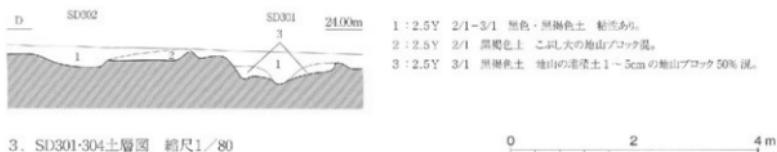
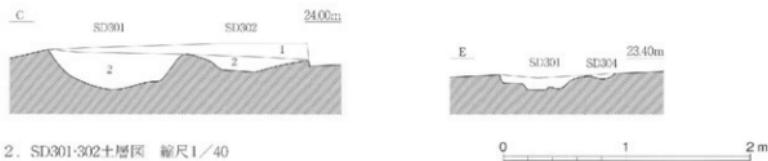
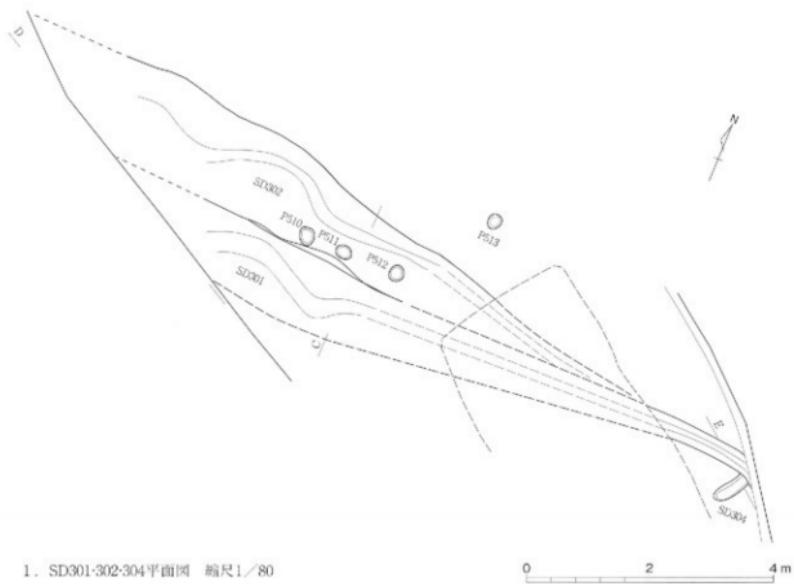
第 16 トレンチ南面

0 2 4 m

図面〇八 遺構実測図



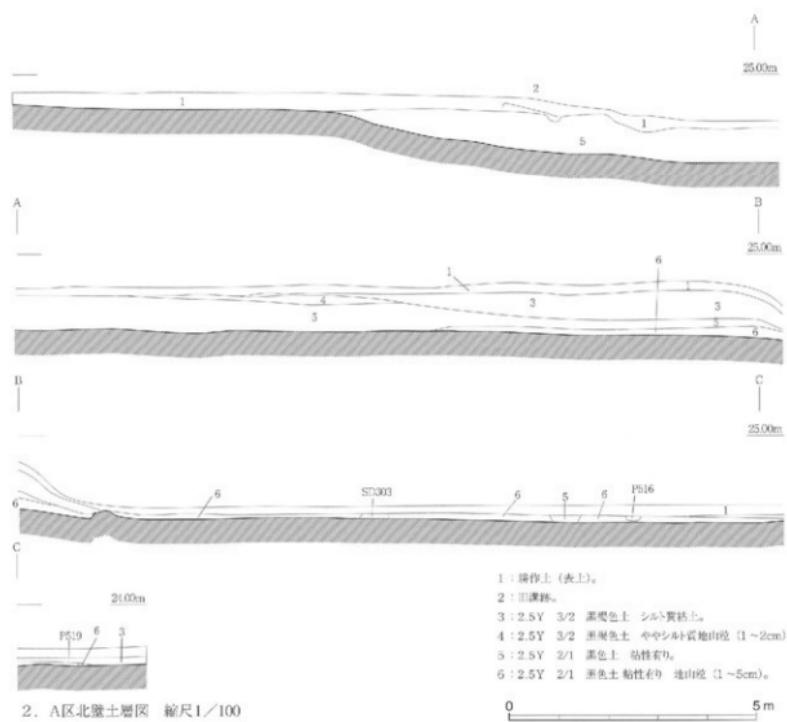
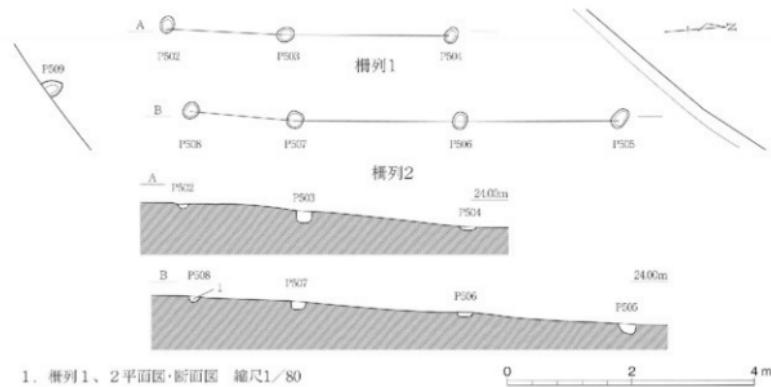
図面〇九 造積実測図



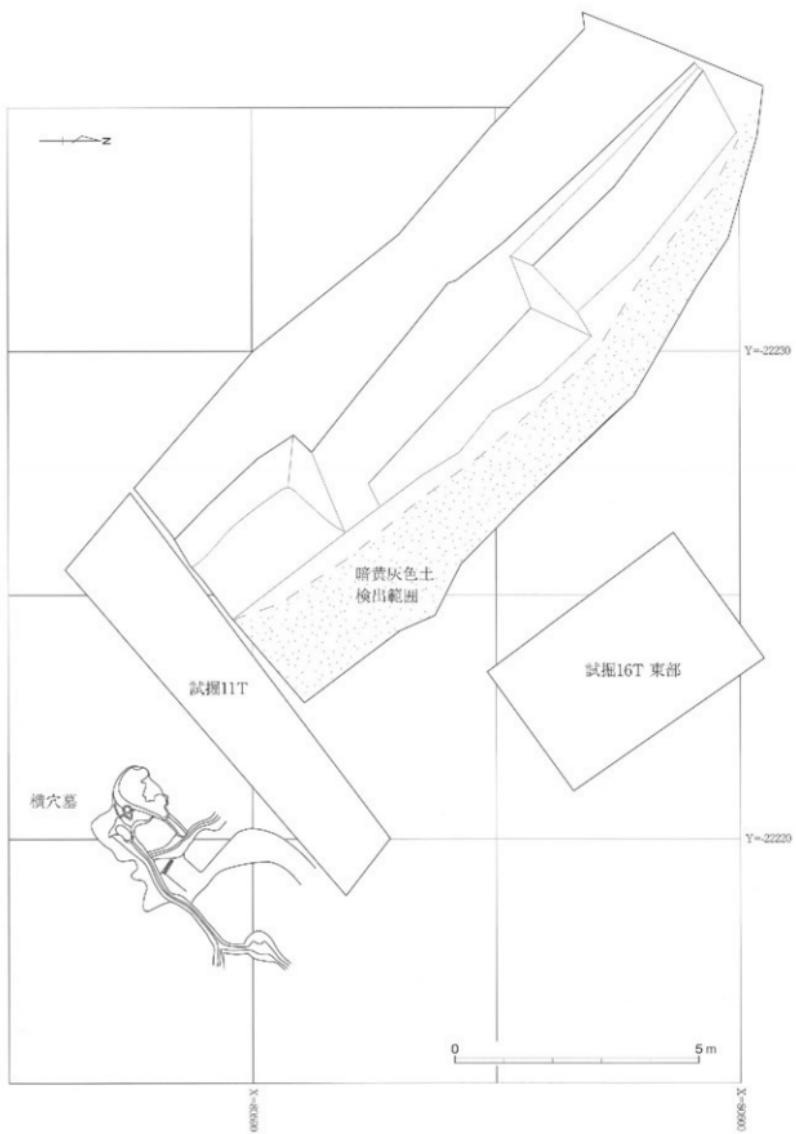
A区実測図〔1〕

縮尺1/40・1/80

図面一〇  
遺構実測図



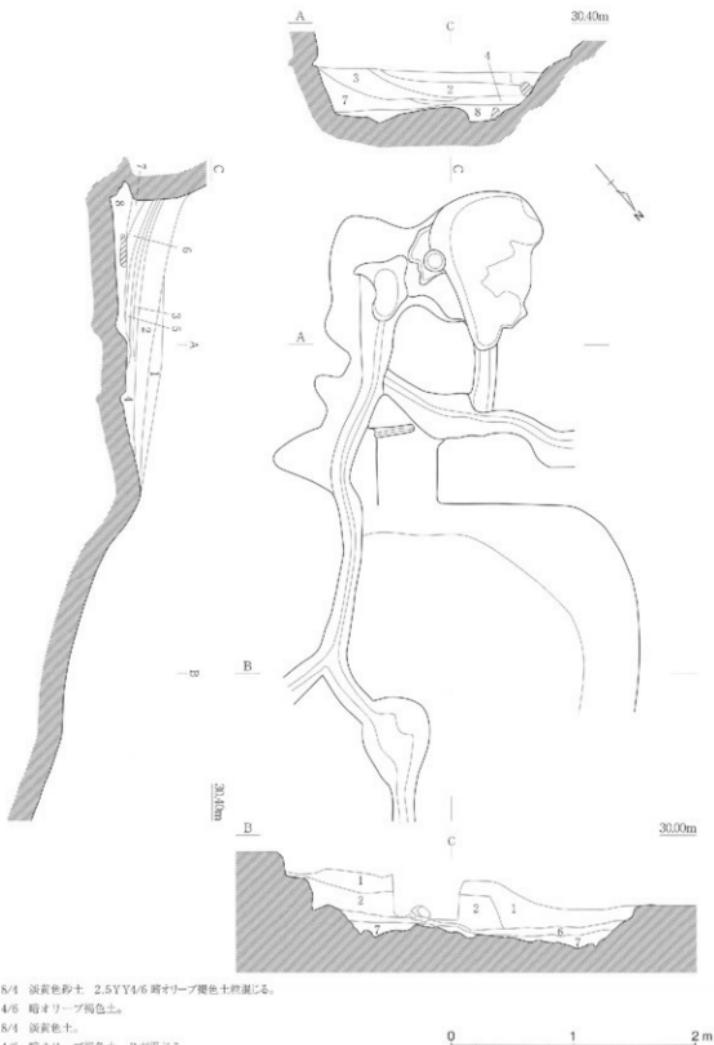
図面一 一 造構実測図



横穴墓全体図

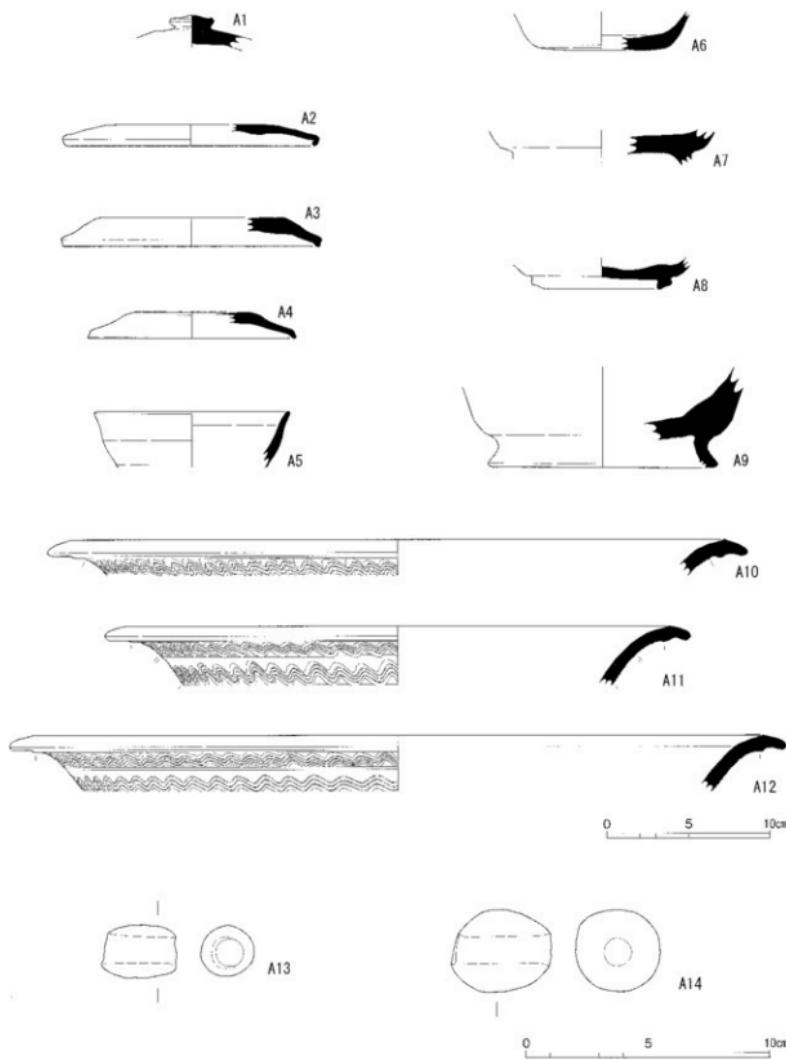
縮尺 1 / 100

図面一二 遺構実測図



- 1 : 2.5Y 8/4 淡黄色砂土。2.5YY4/6暗オーブ褐色土を混じる。
- 2 : 2.5Y 4/6 暗オーブ褐色土。
- 3 : 2.5Y 8/4 淡黄色土。
- 4 : 2.5Y 4/6 暗オーブ褐色土。3が混じる。
- 5 : 2.5Y 4/6 暗オーブ褐色土。やや赤みが強い。
- 6 : 白色砂 2.5Y4/6 暗オーブ褐色土の粒が混じる。
- 7 : 白色砂 粒子粗い。
- 8 : 白色砂 粒子やや細かいが小円錐(5mm ~ 30mm)を混じる。

図面一三 遺物実測図



A区出土遺物 A1~A12:須恵器、A13~A14:土器

縮尺1/3・縮尺1/2



0 5 10cm

上段 = B区 B1~B4 : 索文土器  
中段 = C区 C1 : 須底器、C2 : 珠淵燒  
下段 = 橫穴墓 C3 : 陶器

縮尺 1 / 3

図 版

## 图 版 目 次

- 图版01 遗構写真 1. A区重搅掘前 (南)  
2. A区検出状況 (西)  
3. A区検出状況 (東)
- 图版02 遺構写真 1. A区清検出状況 (南西)  
2. A区SD301・302土層断面 (40)  
3. A区溝完掘状況 (南西)
- 图版03 遺構写真 1. A区横列検出状況 (南西)  
2. A区横列完掘状況 (南西)  
3. A区完掘状況 (東)
- 图版04 遺構写真 1. A区完掘状況 (西)  
2. C区着手状況 (東)  
3. C区作業風景 (北)
- 图版05 遺構写真 1. C区土層傾斜状況 (東)  
2. C区完掘状況 (東)  
3. C区完掘状況 (西)
- 图版06 遺構写真 1. 横穴墓検出状況 (北)  
2. 横穴墓墓前域掘削痕 (北)  
3. 横穴墓内堆積状況 (北東)
- 图版07 遺構写真 1. 横穴墓隕堆積検出状況 (西)  
2. 横穴墓隕堆積検出状況 (東)  
3. 横穴墓玄室内完掘状況 (西)
- 图版08 遺物写真 A区・B区・C区・横穴墓



1. A区重機掘削 (南)



2. A区検出状況 (西)



3. A区検出状況 (東)



1. A区溝検出状況 (南西)



2. A区SD 301・302  
土層断面 (東)



3. A区溝完掘状況 (南西)



1. A区格列検出状況  
(南西)



2. A区格列完掘状況  
(南西)



3. A区完掘状況 (東)



1. A区発掘状況 (西)



2. C区着手状況 (南)



3. C区作業風景 (北)



1. C区土層傾斜状況 (東)



2. C区発掘状況 (東)



3. C区発掘状況 (西)



1. 橫穴墓檢出狀況 (北)



2. 橫穴墓前坡揭露痕 (北)



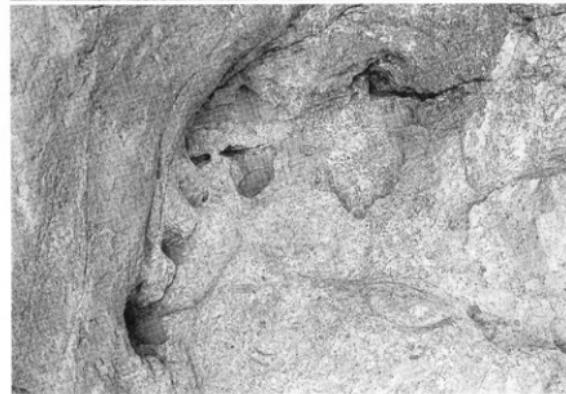
3. 橫穴墓內堆積狀況  
(北東)



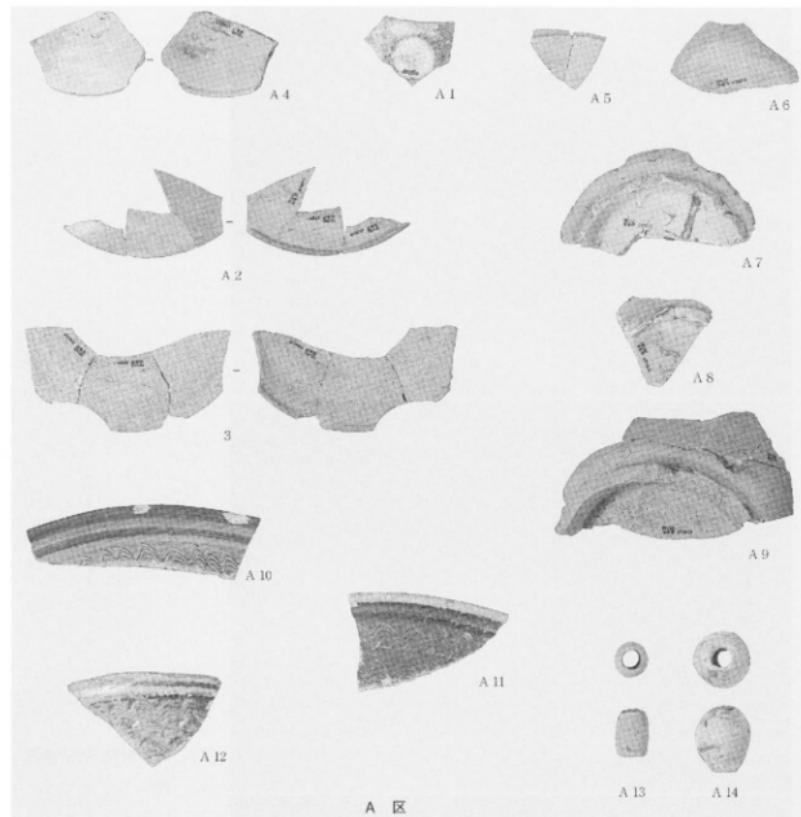
1. 橫穴墓竈堆積檢出狀況  
(西)



2. 橫穴墓竈堆積檢出狀況  
(東)



3. 橫穴墓玄室內完掘狀況  
(西)



B区

横穴基

C区

C2

---

高岡市埋蔵文化財調査報告第19冊

寺谷内遺跡・寺谷内横穴墓調査報告

- 平成19年度、岸谷川砂防改良事業に伴う調査 -

2009年2月20日

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

印刷所 株式会社トーザワ

富山県高岡市佐野新町1386-1

---

